
LeGrand De LaGoon

新野篤史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L e G r a n d D e L a G o o n

【Nコード】

N 8 0 0 2 S

【作者名】

新野篤史

【あらすじ】

ー ル グ ラ ン ド ラ グ ー ン ー

こことはどこか別の世界、奇跡の神と理の精霊が住まう世界。ラグーン最大の勢力を誇るセイディエス帝国において皇帝の第二子が誕生する。司教殺害に遭遇したダスティンは帝位継承争いに絡んだ謎に巻き込まれていく。

群像劇形式で書こうと思うので、少し話が分かりにくくなっているかもしれません。

序章

薄明るい路地裏に鐘の音が響く。昼時の日差しは熱を帯び、夏の到来を予感させる。

少年が独り、遠く聖堂から流れてくるその福音に耳を傾けていた。歳の頃は7、8歳だろうか。黒髪で粗末ななりだが、歳のわりには落ち着いた、どこか不思議な印象を受ける。彼は建物で四角く切り取られた空を見つめている。そこから射し込む光を浴びて、その瞳は理知的な輝きを見せる。

「バルカ、お昼ですよ。」

バルカ、と呼ばれて少年が振り返る。母親らしき女性が立っている。少年は問いかける。

「お母さん、あの鐘はどうして鳴ってるの？」

「陛下のお子がお生まれになったの。だからそのお祝い。」

「ふーん。じゃあ、お父さんは陛下のところに行ってるの？」

「そうよ。この時間だと明日まで戻ってきそうにないわね……。そんなことより早くお昼食べちゃいなさい。午後から先生のところに行くんですよ。」

「うん、わかった。」

二人はそろって薄暗い我が家へと帰って行く。

裏通りの石畳、その隙き間を割って小さな黄色い花をつけたカタバミが旺盛な成長を見せる。まるで少しでも日だまりに近づこうというように。夏はもうそこまで迫っている。

憂鬱

クロードは憂鬱だ。この一週間勉強も剣術修行も手につかない。

「これは由々^{ゆゆ}しき事態だな。」

小声で独り言をつぶやいてみる。

クロード・オレフィス・ガルダン、世界最大の帝国セイディエスの第一皇子^{おうじ}。申し分のない身分に生まれ、なに不自由なく暮らしてきた。金髪碧眼の中性的な顔立ちにスマートな体つき、11歳とは思えないほど大人びた言動はそれだけで周囲を期待させるものがある。すでに将来帝位につくことを自覚し、常にそのことを意識した行動を心がける、という少々出来すぎた皇子ではある。

表向きは完璧な皇子。だが、そんな皇子には悩みがある。

弟が生まれるのだ。もしクロードが皇帝ファビオ一世とその皇紀^{きじ}サルドの子であつたならこのような問題は起きなかつただろう。今度生まれる第二皇子ルイは皇帝と皇紀の子、一方クロードは皇帝と第三妃^{きさき}マリアの子である。ただ、これだけで継承権がルイに移るとは限らない。現状だけ見ればクロードが帝位を次ぐ方が自然である。後は「今後の行い」がすべてを決めることになる。

「ご機嫌はいかがですか、クロード様。」

物思いにふけっていると背後から声がする。振り返ると宰相のグアンリー・ウェイが立っている。

彼はこの国始まって以来の天才と呼び声高い。弱冠23歳の若さで宰相の地位に就いて以来、20年以上国政のトップとして辣腕^{りやく}を發揮し続けている。白髪まじりの短い黒髪と整えられた口ひげ、モンゴロイド系の顔立ちで温厚な目をしている。彼はいつも華服^{かふく}という変わった着物をきている。今日も暑くなるのを見越してか風通しの良さそうな生地^{かみ}の白い華服を身にまとっている。

クロードの顔が曇っているのを見て取ったのかウェイは続けた。
「お見受けしたところ何やらお悩みですな。何ならお話しになってください。お力になれるかもしれませんぞ。」

「相変わらず勘のいい人だな……。」

クロードはそう言いつつ辺りを見渡す。朝の庭園だ。宮廷の中で自分の部屋の次に落ち着く場所、木陰のベンチでぼんやりするのがクロードのお気に入りだ。夏を前に庭園の草木はどれも生き生きして見える。今は特にアジサイの花が見事に咲いている。だが人気は全くない。庭園だけではない、宮廷全体が今日は朝から妙に静かなのだ。

ひとしきり周りを確認するとクロードは口を開いた。

「みんなサルド様の様子が気になるのかな？今日はびっくりするくらい人に会わないんだ。」

「弟君は今日にも生まれるようですし、まあ、当然でしょう。心配事というのはそのことですか？」

「うん。正直あんまり喜べないんだ。」

「でしようなあ。血統だけでいけば継承権はもうすぐお生まれになるルイ様にある。しかしむざむざ次期皇帝の座を手放すのも癪だ、というわけですか。」

「ご名答、さすがだ。というわけで私は今思案に暮れているわけだ。なにか名案は浮かんだ？」

「名案とはいきませんがお伝えできることが一つあります。あなたのお父上は第三継承者だった、ということです。」

私はあなたの特殊な事情についても聞き及んでおります。お父上より苦しい立場におかれることとは思いますが、何よりあきらめないことが肝心でございます。きっと神様はあなたを見つけてくれるでしょう。」

「そうですね、結局それしかないんだ。よいことを言ってくれた、ありがとう。」

少し気が楽になったのかクロードはベンチを後にして歩き出す。

ウェイはそのまだ幼さの残る華奢な後ろ姿を見送る。「こればかりは予想が来る。結果は5年後といたところかな。」遠ざかる皇子を眺めながら時の宰相はわずかながら不安に駆られる。自身二度目の帝位継承は彼にとっても憂鬱の種であることに変わりはない。

エーベルによる短い講義―その1

おや、バルカ君かな。いやー、今日はもう誰も来ないのかと思つてたよ。どっちにしてもこの時間はみんな来たがらないんだけどねえ？「僕は好きで来てるんです。」だって？うれしいこと言ってくれるじゃん。いやー、一応俺も専門家だしさ。やっぱ算数とかじゃなくってさ、こういう話をしたいわけよ。つつうわけで今日はここナヴィアスのお話をしようじゃないの。

帝国の首都ナヴィアスは又ベス山脈南部に広がるガルディア平原その平原を流れるミゼリ河の下流に位置している。この河は海からかなり上流まで大型船で上がって来られるんだ。で、内陸との貿易の中継地としてナヴィアスが発展してきた。人口100万人、でっかい港と5つの街道の合流地点。まさに世界の中心だな。

帝国が首都をおいたのは100年くらい前だな。それまでも入れ替わりでいろんな国が好き勝手に都市開発したもんだから、発展した代わりに忘れ去られた一角つてのもある。それがここペイジンストリートさ。今やヤバいやつがいっぱい集まってやがるって噂の都市伝説だよ。政府の偉いさんは入り方はおろか場所さえしらねえって言うんだからハンパじゃないね、こりゃ。

それはそうと、今日、皇子様おうじさまが生まれたんだって？来週、陛下ともども大聖堂に行かれるはずだし見てこいよ。ん？お前行ったことないの？ヴァレスト家の息子なんだし行ってこいよ。良い機会だぜ。で、このナヴィアス大聖堂だが実は国内二番目の規模なわけだ。

一番はもちろん教皇様のお住まい、聖ナヌス聖堂！我らが皇帝は教皇の守護者つてのが本職だからね。で、帝都にもでっかい聖堂が建つてると。

後はまあ、ナヴィアスつてのは多民族国家セイディエスの象徴みたいなもんでさ、いったいどんだけの民族がいるのか俺にも見当つ

かんわ。多分世界中から集まってるからねー。やっぱこの町が面白いのってそこだと思っただよね。ジョーさんとこなんか床が畳とかいって草で出来てんの！いやー、エキセントリックだよ、まったく！

んなわけで今日はここまで！詳しくはバルタザール・エーベル著『ナヴィアス経済史』を読むべし！

医師

夕立があつたらしい。庭園の草木はよりいつそう匂い立ち、夕闇のせまる宮殿全体がその香りに包まれているかのようだ。男が独り、後宮からのびる渡り廊下から、わずかな残光に照らされた庭園を眺めながら一服いれている。

「司教のおっさんの当たりだったか。お偉方はまた面倒が増えたな。ま、俺には関係ないけど……。」男は心の中でそうつぶやく。40歳も目前といった感じの男だ。あご髭をたくわえた小柄な容姿だが、どこことなく風格がある。

後宮の扉が開き、数人の従者を引き連れた男が現れる。白髪で老年にさしかかつてはいるが、いかにも軍人といった大柄な体格で未だ衰えを感じさせない。彼はタバコの男に声をかける。

「ヴァレスト先生、今回はどうもありがとうございました。おかげさまで元気な赤ん坊を授かり、娘ともども喜んでおりますぞ。」

男は慌ててタバコをはなすと、欄干らんかんおかれた灰皿に投げ入れる。

「これはガルダン將軍、わざわざお声かけいただき恐縮です。今回はおめでとうございます。」

「娘には長らく子ができなかったのな。しかも男子、喜びも一入ひとしゅうというものです。」

「そうでしょうとも。今後ともしばらくは様子を見てまいります。」

母子ともに私にお任せください。」

「それでこそ先生ですな。よろしく願いますよ。」

そう言うたガルダン將軍は正殿の方へと去って行った。

ヴァレストはフウ、とため息をつく。「やれやれ、あのじいさんやたらうれしそうだったな。まあ、これでオレフィス將軍の鼻を明かせるわけだし、当然と言やそうか。」

日も落ちた。街に明かりが灯りだすと、宮廷の廊下にも灯がとも

される。宮廷医師コルデイス・ヴァレストは長めの一服を終える。

「さて、そろそろ戻りますか……。」「そう思ったところ、また後宮の扉が開いた。今度は宮仕えの若い女性がやってきて彼に話しかける。

「ヴァレスト先生、マリア様がお呼びです。お忙しいとは思いますが、ご同行願います。」

「いや、今は暇でしょうがないんだ。喜んで参りましょう。」

第三紀マリア・オレフィスは皇子クロードの母親にして帝国一の美女として名高い。まだ20代とはいえ、子どもがいるとは思えないほどに若々しく、クロードにも受け継がれている見事な金髪に、品のある顔立ちをしている。名門オレフィス家の出身で、現在帝国軍の将軍であるラザール・オレフィスの妹にあたる。彼女自身、今回のルイ皇子誕生については穏やかならぬ心情であろう。

ヴァレストは彼女の待つ部屋へと通された。窓際のイスに腰掛けるマリアはこころなしか疲れて見える。

「どうかなさいましたか。しがな町医者に出来ることでしたら何なりとお申し付けください。」

彼の申し出に対し、マリアは少しためらったものの口を開く。

「司教様のおっしゃっていたことは本当でしたか？本当に男の子だったのですか？」

「ええ、間違いなく。先に申し上げますが、便宜上そのように申し上げているわけではありませんよ。第一あのガムザ司教が間違えるはずないでしょう？あなたのときだってそうでした。」

「そうですね……。」

ヴァレストは彼女の目がさつきより暗く沈んでいるように見えた。落ち込んでいるのだろうか。

「マリア様、今からそのように思い悩みましては体が持ちません。まだ時間はあるのです……。」

妃は彼の言葉を途中でさえぎるところ切り出した。

「最初にあなた、『何なりと』とおっしゃいましたわね。」

何やら意味深である。ヴァレストは仕方なく「確かに申し上げました。」と答える。

「では、私が『ルイを殺して。』とお願いすればやってくれるのかしら？」

「……………」

突然の申し出に医者困惑する。「頼みとはこのことか！」ヴァレストは内心穏やかではない。「この人がこういう女とは思いませんかったな。」

彼は慎重に言葉を選んで返答する。

「申し訳ありませんがお断り致します。私は医者でして、命を救うことが仕事でございますから。」

「なるほどねえ、『仕事の範疇外だから出来ません』ってことね。

言い訳としては合格ですよ。変なこと言ってごめんなさい。」

「とんでもない、思いとどまっていただければ十分ですよ。」

「そうですね。ただ、今の話はくれぐれも内密にお願いしますよ。」

そう言っただけ彼女はとおきの笑顔をつくってみせた。

皇紀サルドの部屋へ向かう途中、ヴァレストは先ほどのことについて考える。「あの女、思った以上に危険だな。最後の笑顔もどうせ『ばらしたら殺す！』ってことだろ。絶対まだ諦めてないし、放つとくのもヤバイよなあ……………」

考えはするものの名案など浮かぶはずもない。

「まずは目の前の仕事をこなすこつたな。」

彼はひとまず気持ちを切り換えると、サルド妃^ひの部屋のドアをノックするのだった。

エーベルによる短い講義―その2

やあ、ワキール。朝早くからどうしたの？神様の夢を見た？ああ、君は預言者だったね。その夢が気になるのかい？何？「神様が俺の方に近づいてくる夢」を見たのか。で、その意味が分からない、となるほどねえ、君はまだ自分の力を正確に理解できてないみたいだねー。まずは自分と自分の世界をわかることが大事だな。よし、じゃあヒントになるような話をしよう。つつつわけでちょっと難しいけど世界のお話だ。

世界ってのは3つの部分から出来ている。すなわちアニマ、マテル、ロゴス。アニマは精神世界、神やら精霊やらのいる部分だ。マテルは物質世界、まあ俺らのいるとこ、この世だな。後な、ロゴスってのが面倒で、これは人間や動物の魂のことだな。

で、大事なものはこの3つの関係だ。まずアニマとマテルだけど、神と精霊でマテルとの関わり方が違うんだ。まず精霊だ。正確には「理の精霊」^{こころ}つつつて、マテルのルールそのものだ。水は低い方に流れ、鉄は硬く、火は熱い、これは全部それぞれに精霊が宿ってるからそうなるんだ。逆に言うと、精霊はマテルに縛り付けられる存在でもあるわけ。精霊の理は絶対普遍、つまり変えるのは不可能普通ならね。

そこで神様の登場だ。精霊はルールの数だけウジャウジャいやがる。が、しかし。この世に神は一人しかいない！これは絶対なわけ。「奇跡の小人」ミラナヌスってのがそれだ。小人ってくらいで実は子どもらしい。で、コイツは何をするかっていうと奇跡を起こす！これだ！奇跡ってのはあり得ないことが起こるってことだろ？要するにコイツの仕事はマテルのルールをぶっ壊すことだ。

例えば船で事故って死にかけのやつがいたとする。99.9%助からん。でももし神様がこれを「見つけた」ら手を伸ばしてその0.

1%の確率を拾い上げる。つまり事故ったやつは助かる！なあ、奇跡だろ。でも、こいつは子どもだから気が向いたときにしか仕事をしない。まあ、お遊びだな。子どもが干潟で貝殻を探すように奇跡を起こす。似たようなことが教典に書いてあって、この世界がラグーンって呼ばれてんはそういうことだ。

で、次が肝心のロゴスの話。ロゴスは性質から言うところアニマとマテルの中間にある。心は見えないけど確実に体の中にあるだろ。中間ってことはつまり、俺たちは普段マテルで暮らしてるけど、奇跡が起きりゃアニマを見ることが出来る！ってことだ。で、たまにお前みたいなやつが出てくる。神様に気に入られるとそうなるらしいけど、何を気に入ってるかはわかつとらん！

精霊の見えるやつは受言者^{うけいんしゃ}、神の見えるやつは特別に預言者と呼ばれる。だからお前は預言者だ。コイツらはいろんな超能力が使えるけど、例えば結構特殊なんだがナヴィアス大聖堂の司教にオレゲ・ガムザって人がいて、なんとこの人はロゴスが読める！ロゴスってのはあくまで根源的な感情やら自我やらで思考とは別、だから相手がなに考えてるかまではわからんだろうけど、それでもその人の感情やら本質は丸見えてわけだ。まあ、この人はもっぱら生まれる前の赤ちゃんの性別がわかるってんで有名なんだけどね。ペイジンにも火と話せるルクレティアつつう婆さんがいて、変な話がいつぱい聴けるから、暇な時にでも行つてやんな。一人暮らしたから喜ばせ、きつと。

んなわけで今日はここまで！詳しくは……って俺、宗教の本は書いてないわ。まあ、不安かもしれないけど同類の話聴いたりして気楽にやんな。そのうち自分がなに者なのかもわかるって。

酒場

昼時、下町の酒場『ブライト』の勝手口が開くとバルタザール・エーベルがのっそりと姿を現す。30代半ばの細い男で、無精髭とボサボサの頭がトレードマーク、いかにも貧乏学者風情だが身なりさえ整えればそれなりに見られる容姿ではある。

「今日もまた暑っちな。おばちゃん、いつものね。」

彼は狭いキッチンを通って店に入って行く。『ブライト』はジャックとコニーのブライトマン夫妻が営む酒場だ。店内は比較的広く30人は入れそうだ。こざっぱりとしてワイミ―地区の酒場としては上々である。バルタザールは席に着こうと閑散とした店内を見渡すと、何とも見慣れた光景が目の前に広がっていた。

カウンターの隅に大きな男が独りで腰掛け、まだ昼だというのに酒を飲んでいる。傍らには刃渡りが1m近い刀が置かれている。自称『最強の用心棒』ことジョー・クラウチである。生際^{はえぎわ}がかなり後退しているが、半分ほど白くなった髪をのばして後頭部でくくっている。朱色の着物をさらしの巻かれた腹まではだけ、よく焼けた肌と額に傷のある強面、といういかにもな見た目の男である。

バルタザールは一つ開けて彼の隣に座る。

「おっさん、また昼間っから酒かよ。ちよっとは働いてみれば？」

ジョーは充血した目で彼を睨む。

「うるせえ、仕事はしとるぞ。じゃなきゃこの飲み代はどっから持つてくるってんだよ！」

「ま、言われてみればそうですね。」

「てめえこそ教室空けてこんなところで油売ってていいのか？え、先生様よお。」

「エーベルさんはあんたと違ってちゃんと昼休みだよ！はい、いつものやつね。」

コニーがバルタザールの注文を持ってやってきた。トマトのパスタ

だ。

「午前中は読み書きそろばん。午後は科学と社会。娘のリディアも世話になってんだ。どこぞの飲んだくれと一緒にしないでくれるかい！」

パスタにフォークを突き立てつつ、バルタザールは若干誇らしげである。「気が向いたときだけ来てもらうような教室だが、こうして感謝してもらえるとなんだかうれしいね。俺もやってる甲斐があるってもんだ。」

コニーが行ってしまうと、大人しくしていたジョーが再び口を開いた。

「ところでお前、先週、皇子が生まれたらしいけどよ、それに関してなんか聞いてないか？」

「どういうこと？もうちょつと具体的に言ってくれなきゃ、さすがにわかんないよ。」

「いや悪い。昨日の晩、仕事が終わってからよ、金貰うついでに向こうのお偉方と世間話をしたわけだ。で、そいつが『皇子が生まれたからでかい仕事が入る可能性がある。』とか言うわけだ。詳しいことは教えてくれなかったが、仕事となりや、ちょつとは気になるで、なんかあるのか、と思ったわけよ。」

「いやー、そればかりは何ともだね。ただ、これで帝位継承権を持つ皇子が二人になったわけだから、おたがいを消そうとする動きなんか出てくるんじゃないの？少なくともそっち関係の人たちが予感するくらいには、なんかあるわけだろ。」

内情が知りたいってんなら、もう宮廷からヴァレスト先生が帰ってきてるはずだよ。先生に聞いてみるのも面白いんじゃない？」

「それもそうだな……。って、お前、もしかしてまたなんか企んだりするんじゃないかねえのか？言つとくが俺は20年前のこと、許したわけじゃねえからな！」

「まあまあ、勝手に熱くなるなつての。俺は面白いと思ったことをやるだけだ。前回はそうだった。今回も面白ければそうするし、つ

まんないなら手出ししない。それだけだよ。」

「デメエ！言わせておけば！」

突然ジョーが凄まじい剣幕でバルタザールの胸ぐらを掴む。互いに睨み合う、一瞬の沈黙。

おもむろにバルタザールが口を開く。普段とはうってかわり冷静で丁寧な口調だ。

「ジョーさん、ちょっと飲み過ぎですよ。落ち着いてください。確かに以前あなたにはひどいことをしましたよ。それは事実です。しかし今回はまだ何もはじまっていませんよ。過去の咎で罪人扱いされるなら、あなただってすでに罪人ですよ。」

理屈ではバルタザールにかなわない。ジョーは仕方なく手を離す。「もういい、今のは忘れてくれ。だが、もしお前が一枚噛んでるところがわかったら、その時点でぶった切るから覚えとけよ。」

バルタザールは「わかりましたよ。」と受け流すとパスタを胃の奥に流し込み、そそくさと出て行った。

残されたジョーは珍しく考え事をする。「皇子がどうなるうが俺の知ったことじゃない。が、あいつがまた好き勝手やるのはいいけ好かねえ。よく見とかねえとなあ。ま、差し当たりヴァレスト先生の話でも聞きに行いこうかねえ。」

しばらくすると大男の姿も勝手口の向こうに消えた。『ブライト』には人っ子一人いなくなった。コニーが皿を洗う水音だけが響いている。

エーベルによる短い講義―その3

よー、バルカ君……とそれにリディアちゃんか！めずらしいねー。今日はどうしたの？「明日の予習」？なるほどね、バルカ君と大聖堂に行くわけだ。で、俺に話をしてくれと。いやー、いいね！そういうの。つつうわけで今日はナヴィアス大聖堂のお勉強だ。

この聖堂は教皇様を中心としたミラ教の中では聖ナヌス聖堂の次にデカイ、そして同じく二番目に重要だ。何といっても皇族のイベントことは全部こで行われる。明日は「赤ちゃんが生まれました」って報告する日だ。慣例として誕生の一週間後にやるんだと。で、宮廷から聖堂まで、皇子様のお披露目も兼ねてパレードが行われる。途中ワイミール地区も通るからね。ペイジンストリートを回り込むようにコースがとられるはずだから近道すれば二回見られるよ。

さて、ここからはちよつと根本的な話なんだけど、ミラナヌスってのは気まぐれだ。お祈りしたからって叶うわけじゃない。じゃあ、何で聖堂やら、もつと言うと宗教なんかが必要なのかな？そうだろう？

まあ、確かに「奇跡を信じて」神に救いを乞うつてのはあるだろう。でも本質を言つと、これは俺らを精霊から守るために存在してんだ。おとぎ話によく「魔女」とか「悪魔」とか出てくるよね。あれ、ほんとは精霊なんだよね。もつと正確に言つと、自分の利益のために精霊や神を利用しようとするやつらを「魔術師」という。まあ、魔女だよな。

で、もう一つの「悪魔」だけど、例えばある人が精霊の力を自由に使いたいと思つてるとする。で、たまたま奇跡が起こつて、精霊と会話することになるとする。このとき精霊と契約を結ぶと、その人は己の内に精霊を宿すことが出来るんだ。ただ、ここからが大変なんだ。アニマを無理矢理ロゴスに押し込んでる状態が長く続く

とどうなるか？なんとロゴスはアニマに引きずり込まれてしまう。
で、最終的には精霊に体に乗っ取られて、火の精霊なら跡形もなく
燃え尽きるし、鉄の精霊なら鉄のかたまりと成り果ててしまう。こ
れを世間では「悪魔に憑かれた」と言うわけだ。

聖堂なんかにいる聖職者は神や精霊と話が出る。場合によつて
は悪魔に憑かれたやつらを救える可能性があるわけよ。それだけじ
やなく、この人たちの中には契約なんか関係なしに精霊の力を使え
るやつもたくさんいて、俺たちに協力してくれるわけだ。実際、こ
の人たちの力が大発明につながることもあるから侮れないよー、こ
れは。

まあ、そんなことも考えつつ、明日は楽しんで来なよ。滅多に見
られるもんじゃないからね。

んなわけで今日はここまで！詳しくはバルタザール・エーベル著
『受言者と経済』を読むべし！

逃走

男が走っている。大通りの人ごみをかきわけ、必死の形相で駆けて行く。

続いて憲兵が3人、その男を追っているのだろうか。軽装とはいえ鎧に身を包み、剣を携えている。

パレードにわき上がる群衆には彼らなど目に入るはずもない。大人も子どもも皇帝、皇妃、そして新しい皇子を一目見ようと通りに溢れ出している。さながら凱旋パレードのような盛り上がりである。

男は逃げ続ける。手には小型のスロスポウが握られている。男は後悔と焦りで混乱した頭で必死に考える。「マズイ！マズイ！マズイ！完全に失敗だ！このままでは捕まるのも時間の問題だ。なにか！なにかないか！奇跡は起きないのか！」

そのときだ。男の目は人ごみから裏路地に入って行く子どもの姿をとらえた。黒髪の男の子が一人、続いて赤毛の女の子が一人、商店どうしの間にある細い通路に駆け込んで行った。男は直感的にその子たちの後を追う。裏通りは入り組んでいる。子どもたちを見失わないよう、右へ左へ曲がりながら懸命に後を追う。すると、彼らは突き当たりの骨董商、その半地下の店内へと消えて行った。

男は一瞬ためらうものの、悩んでいる場合ではないことを思い出し、店先の階段を下りると薄暗く埃臭い店内へと足を踏み入れる。店には誰もいないようだ。

「不用心だな、さて、あの子たちはどこへ行ったのだろうか？」

男が店の奥に進むとカウンターの向こう側に扉があり、半開きになっている。彼らはどうやらそこから出て行ったらしい。男はそこから漏れる光に誘われるように扉を開き、ペイジンストリートへと足を踏み入れる。

「クソッ、あの野郎どこ行きやがった。」

男を追う憲兵の一人が忌々しそうに声を上げる。そのとき別の道を搜索していた憲兵がやってきて報告する。

「オイ、やつはこつちだ。ジョージが骨董商の中に入るのを見たらしい。」

「ジョージはどうした？」

「先に追いかけてるよ。俺たちも急ごう。」

男は不思議な感覚にとらわれていた、まるで夢を見ているような骨董商の裏口を抜けた瞬間、まるで異世界に迷い込んだような錯覚に陥った。建物はどれも3階以上の高さで壁のように高くそそり立ち、上階どうしをつなぐ橋のようなものも見える。細く入り組んだ路地は石畳で丁寧舗装され、ところどころ噴水を備えた広場のような場所もある。そしてそれらすべてが家々の隙き間をとおして射し込む光に映し出されて、美しく輝いていた。住人たちはパレードを見に行ったのだろうか？どこを見ても人影はない。かすかにパレードの音が流れてくるばかりで、あたりは静まりかえっている。

「ここはなんだ？ほんとに奇跡が起こったのか？」

男はしばし、ここに入った目的を忘れていた。

遠くで鎧の擦れ合う音が聞こえる。男はハッと我に返ると再び走り出した。子どもたちの姿はもうどこにも見えない。仕方なく適当に当たりをつけて角を曲がってみる。再び不安と焦燥が心を支配し始める。男はそれを振り払うかのようにもう一度角を曲がった。

角を曲がるとその先は十字路であった。そして真ん中の道は行き止まりだ。よく見ると行き止まりの暗がりに見知らぬ男が立っている。手招きをしているようだ。逃走者は訝^{いぶか}しがりながらも男の方へと近づいて行くのだった。

合流した憲兵たちもこの不思議な町に戸惑っていた。

「オイ、こんなところ知ってるか？」

「イヤ、はじめてだ。」

「これ以上探すのは無理じゃないか？一回戻って応援を呼んできた方が……」

その時、話し合いをさえぎって背後から、少ししゃがれた野太い声が響いてきた。

「おう、憲兵がこんなところでなにしてやがる！『応援を呼ぶ』だあ？ふざけんじゃねえぞ！」

彼らが振り返ると身の丈2mにもとどこうかという大男が、これまた1mをこえる刀を携えて立っている。

憲兵は反射的に抜刀する。

「貴様、帝国警邏隊^{けいら}に盾つくつもりか。」

「チッ、テメエらこそ実力わきまえて物を言いな。その鷹の紋章、第十一分隊だろ？『用心棒のジョーさん』を知らんとは言わせねえ！」

ジョーは不敵な笑みを浮かべる。憲兵はその名を聞いて明らかに緊張したようだ。一人が震える声で虚勢を張る。

「あんたがどんだけ強いかわからないが、三対一だ。大人しく引き下がれ！」

ジョーはこのやりとりにイラついてきたようすで吐き捨てるように言った。

「だからどうしたよ？お前らは俺たちのテリトリーで剣を抜いた。選択肢はねえ。死ね！」

二人の憲兵には何がおこったのかわからなかった。「死ね！」という怒声とともに大男は目の前から消え失せ、頭上から赤い雨が降ってきた。そして、次には目の前の石畳にカラン、と音を立てて何やら丸いものが落下した。足下に転がる首なしの死体を見てもなお、彼らは仲間の死を認識するのに実に数秒を要したのだ。

「全く、予想以上の雑魚だな。」

背後から、また、あの声がする。二人は仰天して振り返る。あの男

が立っている。抜刀した刃からは鮮血が滴っている。あんな大きな刀でどうやったらあそこまで速く動けるのか、ジョーの剣術は彼らの想像を遥かに超えているらしい。彼らは逃げられないと悟り腹をくくる。剣を構えジョーと対峙する。

「ほお、ちよつとは根性あるねえ。けど、俺は殺しに時間かけるのはあんま好きじゃないからな。」

ジョーは刀を正眼に構えると一気に踏み込んだ。相手が反応する前に一人をのど元から脳天にまで貫き通し、そのまま数メートル突き飛ばす。残りの憲兵はこの隙に背後に回り込み、がむしゃらに切りかかるうとした。

「しゃらくせえ！」

ジョーは振り向きざま、返す刀で力任せに切り伏せる。憲兵の体は右の肩口から鎧ごと二つに叩き割られた。絶叫とともに彼は崩れ落ちる。断末魔の叫びがあたりにこだました。

逃走者は何者かの叫び声を耳にする。ただ事ではない、ということとはわかった。謎の男が口を開く。

「ジョーさんだな、きつと。おめでとう、暗殺者さん。追っ手はみんな死にましたよ。」

男は人懐っこく逃走者に笑いかける。逃走者は答える。

「あの、状況が飲み込めないのですが。あなたは誰ですか？なぜ私のことを知っているような口をきくのですか？」

「私ですか？私はあなたに力を与える者です。あなたは今奇跡の中にいる。この町に迷い込んだのも、追っ手から逃れられたのも、そして私にあったことさえ奇跡なのです。あなたをお待ちしております。いえ、正確には奇跡的にここにたどり着くであろう誰か、を待っていたわけです。」

「それで私にどうしろと？」

「答えはこの扉の向こうに……。」

そう言うと男は突き当たりの小さな扉を指差した。男は続ける。

「あなたは目的達成のためには手段を選ばない、という覚悟でしょうか？たとえ我が身が滅びようとも任務を遂行する、という決意がありますか？」

逃走者は答える。

「もちろんです。私は一度失敗してしまった。もう失敗は許されません。」

「いいでしょう。」そう言つと謎の男はノックもせず扉を開けると、こう言い放った。

「ルクレツィア！サラマンドーを呼び出せ！」

隊長

パレードはもうじきクライマックスだ。ナヴィアス大聖堂の中にまでその音はかすかに、そして徐々に大きく響いてくる。この大聖堂を取り仕切るガムザ司教は妙な胸騒ぎを覚える。自身のロゴスに問いかけても、わずかに「不安」と「恐れ」を感じるとしか答えてくれない。ただ、彼も人間である以上知恵を絞りあれこれと考えてみるのであった。

彼は自室で考え込んでいた。気にかかるのは先ほど報告を受けた男のことだと思い当たる。

「その男は何者だろうか。まだ若い、青年だったらしいな。警備の目を盗んで聖堂内に侵入してくるとは、よほどの覚悟があつてのことだろう。クロスボウで武装していたらしいから、誰かを殺めんとする者、あるいはその差し金か……。ならば標的は御子様^{みこ}というのが妥当であろうか。いや、あるいは陛下、お妃、という線も捨てきれんか。」

男は巡回中の憲兵に見つかり逃走したのだ。おそらく今頃は捕まっていることだろう、と司教は想像する。しかし、胸騒ぎは収まらない。どうも、状況はもっと複雑な気がしてならないのだ。

「神がおいでになつていいるのかもしれない。」彼はふとそんなことを思うのであった。

ガムザが礼拝堂に姿を現すと、すでにあらかた準備は整えられていた。白を基調とした壮大な堂内は、装飾で埋められた高い丸天井と、窓を彩る美しいステンドグラスにより、その壮麗さをよりいっそう際立たせていた。

数人の修道士があいさつにやってくる。遅れて一人、5歳くらいの男の子がやってきてガムザに話しかける。

「お久しぶりです、ガムザ様。僕のこと、覚えていますか？」

「もちろんだとも、ヤン・クリダ。大きくなったものだ。いつから修道院に？」

「4月からです。ガムザ様はなかなか人前にお出にならないから、今まであいさつできなかったんです。」

「そうかね、それは申し訳なかったね。私もいろいろと忙しくてね。」

「いいです。今日ちゃんとごあいさつできたので。」

「そう言い残して少年は作業に戻って行く。「そう言えば大勢の前に出るのは随分と久しぶりだな。」とガムザは思う。だが、これが胸騒ぎと関係するのは、よくわからないままであった。」

不審者の情報は宰相ウエイのもとにも届いていた。ウエイは警邏隊長ダスティン・カークランドを召還し、現状の把握と今後の対策を練る。ダスティンはまだ若く、24歳で父からその地位を譲り受けて2年目という男だ。周囲からは親の七光りと言う声も聞かれるが、実際には、仕事はできる男である。栗色の髪を短く整え、目鼻立ちのはっきりした顔立ちに意志の強そうな緑色の瞳を持つ。活力にあふれる見た目そのままに、優れた行動力で警邏隊を率いている。二人は宰相の執務室で向かい合う。ウエイはダスティンの様子をちらり、と確認すると口を開いた。

「警備の配置は正解だったようだね。しかし、聖堂内にまで侵入を許したのは予想外だ。」

「申し訳ありません。不覚を取りました。」

「それはよい、何事にも不測の事態はつきものだ。何より、ことが大きくなる前に不審者を発見できたことは大きかった。」

さて、そこで次の一手をうたねばならん。たしか、男はまだ捕まっていないのだろう？」

「はい、現在、第十一分隊の者3名が追跡中との報告を受けております。再度の襲撃に備え、警備は大聖堂を中心に随時増強中です。」

「いいだろう、ではもう少し核心に近い話をしよう。君は、男がい

つたい誰を狙って侵入したのだと思う？」

「それは、普通に考えればルイ様ということになるでしょう。」

「そうだろう、普通ならな。しかし、私はルイ様が生まれたときから3つの可能性を予想しておった。まずルイ皇子、そしてファビオ様、もう一つはガムザ司教だ。」

「最初2つはわかりますが、ガムザ様はどうして？」

「実は彼はクロード皇子の王位継承を不利にする情報を持つておる私も存じ上げているが、ここで言うことは出来ない。動機があるのはクロード様に組する何者かだが、標的がガムザ様である場合にはかなり選択肢を絞ることが出来るはずだ。」

「なるほど、了解しました。それで、今の段階ではどうお考えですか？」

「まだわからんが、司教様だろうな。侵入のタイミングからすると男はダミーである可能性が高い。警備の意識を皇子と陛下に集めることによって、ガムザ様に近づく隙をつくろうという魂胆であろう。」

「あの方には常々こちらから護衛をつけておりますが。」

「普段と異なる状況下では、思わぬ隙が生まれるものだよ。彼も標的である可能性を考慮して警備に当たってくれ。」

「了解しました。」

ダステインが部屋を立ち去ろうとすると、ウェイが慌てて呼び止めた。

「もう一つ大事な話があるのだよ、カーランド隊長。」

「なんででしょうか。」

ダステインは怪訝そうな表情を見せる。ウェイはかまわず話し続けた。

「仮にガムザ司教がターゲットであつた場合を想定して、君に一つお願いをしたい。」

「お受けできるかどうかは、お話をうかがってからですな。」

「よろしい。ではさっそくだが、今後犠牲になるであろう人物の監視、および黒幕の搜索を頼みたい。」

「あの……、お願いは一つのはずでは？」

「聞いておればそのうちわかる。」

「……わかりました。それでは、もう少し詳しくお聞かせ願えますか？」

「まず今後の標的についてだが、司教と同じ情報を持つ人物、次いでクロード様が帝位に着く際の障害となる人物が狙われるだろう。差し当たっては前者が標的とみるのが妥当だろうな。」

次に今回の黒幕についてだが、先ほどから言っておる『情報』について知っている人間というのはほとんどおらん。つまり、標的〃容疑者というわけだ。

では、今からいう者の身边を探ってみてくれ。帝国第三軍將軍ラザール・オレフィス、第三妃マリア・オレフィス、宮廷医師コルデイス・ヴァレスト、そしてこの可能性は低いが皇帝ファビオ・ネヴァレス・ガルダン、および第一皇子クロード・オレフィス・ガルダン、以上だ。」

「……あの、職務の範疇を越えているのですが、もしかしてウェイ様は個人的に私に頼んでおられるのですか。」

「このことは公に出来ないのだな。君も信頼できる部下を使って事に当たりたまえ。」

「……わかりました。この任務は私が個人的に負わせていただきます。」

ダステインは宮殿の正門へと急いだ。頭の中にはいくつかの疑問が渦巻いている。「『情報』とはいったいにどんなものなのだろうか？ なにか僕の知らない事実があるのか。それに、調査の話もひつかかる。『情報』はウェイ様だって知っている。あの人の依頼だから当たり前かもしれないが、調べなくてもいいのだろうか。」

正門には警邏隊の馬車が待っていた。「とにかく出来ることから

やるしかない。」彼は持ち前の思い切りの良さで気持ちを切り替えると、馬車に飛び乗った。

彼を乗せた馬車は大聖堂へと道を急ぎ、宮廷を後にするのだった。

ブレノ博士の政治学講座―その1

クロード様、よろしいですか？なにやら気もそぞろ、といった様子ですね……。ま弟君^{おにいさま}にとつては晴れの日ですし、お気持ちが変わらないでもありません。が、やるべきことはしっかりとやっていただかなければ立派な皇族にはなれませんぞ。

今日は帝国の統治体制についてのお話でしたな。今回は3つの事柄、すなわち帝国軍、内閣、元老院について大まかにお教えます。まずは帝国軍ですな。この国が教皇様の守護者を勤め続けるためには不可欠なものですぞ。常備兵力は20万、人口の1%前後ですな。規模、規律、実力、どれをとっても世界最高峰の軍隊でしょう。では、組織を見て行きましょう。軍は大きく六つに分けられ、それぞれ国内の六つの州を統括しています。さらに、陛下の直轄領、そして教皇領の警備にあたる警邏隊、宮殿と皇族をお守りする親衛隊といった部隊が存在します。これらの部隊をまとめているのが、「六将会^{りくしょうかい}」と呼ばれる会議です。この会に参加される皆さんは、帝国でもっとも実力ある方ばかりなので覚えておくべきでしょうな。

まずあなたのお父上、皇帝ファビオ様です。そしてよくご存知の宰相グアンリー・ウェイ。第一軍將軍アベル・ガルダン様は陛下の兄上ですね。第二軍將軍ディーノ・ネヴァレスは陛下の従兄弟^{いとこ}にあたります。第三軍將軍はあなたのお父上、ラザール・オレフィスですね。以下第四將軍エドワード・アディントン、第五將軍フェルディナン・バボ、第六將軍レオン・ルグラン、親衛隊長パメラ・デ・サンクティス、彼女は唯一の女性です。そして、警邏隊長ダステイン・カーランド。以上10名が参加者となります。なんですか？「『六将会』なのに10人なのはおかしい。」とおっしゃるのですか？たしかにもととは6人だったのですよ。帝国の拡大とともに人数も増えたわけですが、名前はそのままなのです。

続いては内閣のお話です。ここは国の政治を実行するところですね。宰相を中心に大蔵、外務、流通、法務の4人の大臣がおります。それぞれ見ていきましょう。大蔵大臣はネヴァレス将軍が兼任しています。主に税の徴収や予算の作成を行います。地方貴族の元締めでもあります。貴族のお話はいずれまた。外務大臣は伝統的に宰相自らが兼任します。周辺国との関係を握る重要なポストです。流通大臣はジャック・ヒエタミエス。商業・貿易を取り仕切り、街道や航路の整備計画も担当します。このポストは元老院から選出するのが慣例となっています。そして法務大臣は私、エミリアーノ・ブレノでございます。あらゆる法律、制度を管理するほか、学校、裁判所などもこちらで統括しております。

最後に元老院のお話をしましょう。元老院は各州にある地方院の代表者と、直轄領の代表者によって構成される議会です。議席は200。議員は三年に一度の選挙で、身分に関係なく選出されます。法律の制定と政治への助言を通し、国民の意見を政治に反映させることを目的として活動しております。現在の議長は流通大臣のヒエタミエスとなっています。

いかがですか？今回のお話はこの国の政治を語る上では基本中の基本ですので、よく覚えてくいたください。

次回からは、各政治分野についてお話ししていくことになります。明日は外交のお話から始めることにいたしました。

誤算

「なぜだ！なぜ、こんなことになる！警備は完璧だった。想定しうる事態にはすべて配慮した。にもかかわらず、これは何だ！」

ダスティンは目の前の凄惨な光景を前にして思わず床に崩れ落ちる。ナヴィアス大聖堂は黒煙に包まれ、髪と肉の焼ける強烈な臭いが鼻を突く。負傷者が多数出ているらしい。煙の向こうから響くいくつもの叫び、呻きが事態の深刻さを生々しく訴える。

突然だった。全身に炎をまとった人間、いや、むしろ炎が人のかたちをしたもの、が聖堂内へと転がり込んできたのだ。灼熱のそれは聖堂いっぱいの人々をその炎に巻き込みながら一目散にガムザ司教に向かって突進し、彼に抱きつくとも自身もろとも司教を焼き尽くしたのであった。その熱と炎のため、警備はおろか誰一人として司教に近づくことさえ出来なかった。

狼狽しつともなんとか事態を落ち着かせたダスティンは事態を飲み込もうと必死である。現場に残されたのは全身真っ黒にこげたガムザ司教の変わり果てた死体のみであった。どう見積もっても犯人分の質量は見当たらない。完全に燃え尽きた、ということなのだろうか。「悪魔に憑かれたのか？」ダスティンはふとそんなことを考える。しかし、彼は信じられない。「悪魔などというものはおとぎ話の中だけだ」そう思い込んでいる。第一、生まれてこのかたそんなものを見たことがない。実際、教皇のお膝元であるセイディエスにおいて、悪魔がらみの事件などというものは全くと言ってよいほどおこらない。彼を含め多くの国民は悪魔とは無縁のところ暮らしてきたのだ。

ダスティンは状況を整理する。

「まず、やるべきことは2つだ。犯人の特定、手段の特定。そして、結果として狙われていたのはルイ皇子ではなくガムザ司教だという

ことが判明した。宰相のいうことが正しいとして、果たして誰が黒幕なのか？こちらは職務と切り離して別に調べる必要が出てきたようだ。」

彼は部下を呼ぶと指示を与える。

「まずは犯人の特定だ。現場から割り出すのは全くの不可能だろう。さつき報告にあった『不審な男』との関係が濃厚だ。第十一分隊の者が帰還次第、調査を始めろ。それから殺害方法に関してだが、受言者がらみの可能性もあるな。これはナヴィアス聖堂の者に聞いた方が詳しくわかるかもしれない。以上のことに全力を注いでくれ。」

聖堂を後にしたダステインは警邏隊の制服から着替えると、ひとまずワイミー地区へと足を向ける。歩きながらも彼は思案に暮れる。「この調査は公に出来ない。つまり政権に近い人物へのアプローチは十分慎重に行う必要があるわけだ。そして、名前の挙がった五名の身の安全についてだ。今回のことからするとクロード様は確実に対象外だ。ルイ様に加担するならガムザ司教は有力なカードとなりうるからな。そうするとクロード様に近いマリア様、オレフィス將軍も除外でいいだろう。陛下にはウェイさんがついているとして、アプローチと護衛の両面から考えてヴァレスト先生からあたるのが正解だろうな。」

しかし、ヴァレストについては決定的な問題がある。どこに住んでいるのか誰も知らないのだ。ワイミー地区に家族と暮らしていることはわかっていて、普段は町医者として住民の診察をやっているらしいということも知られている。問題はあの貧民街のどこに住んでいるかである。「つまり、あそこじゃ結構な名人ってことだろうな。」そう考えたダステインはひとまずワイミーで人が集まりそうな場所を探すことにする。

ワイミー地区は首都ナヴィアスでもっとも貧しい地区である。ミゼリ河に面した古い地区で、現在は使われていない水路や100年

以上前の建物がそのまま残っていたりと、ありとあらゆるものが混在した町である。その町並みもさることながら住む人も多種多様、あらゆる人種、民族が混ざり合って存在している。長年、犯罪組織やならず者の温床として、ダスティンと、管轄である第十一分隊の頭を悩ませている場所でもある。

ワイミーに着いた頃には日も暮れ始めていた。家々にとり出した明かりを眺めつつ、ダスティンは行き交う人々で雑然と込み合ったメインストリートを歩く。彼は若干の息苦しさを感じ、人ごみを避けようと脇道を探す。ふと横を見ると酒場らしい看板が目に入った。中から漏れ聞こえる喧噪から、かなり繁盛していることがうかがえた。

「とりあえず、あそこで情報収集だな。」

彼はそうつぶやくと、『BRIGHT』と彫刻された木製の小さな扉を押すと、騒がしい店の奥へと消えて行った。

ブレノ博士の政治学講座―その2

いやはや、昨日は大変でございましたな。幸い陛下はじめ皇族の皆様にお怪我はなかったようですが、それにしてもあんなことになろうとは。おっと、あまりよいけいなお話でご機嫌を損ねてしまわれとも困りますので、そろそろ始めさせていただきますぞ。

今日は外交のお話でしたな。貿易大国でもある我が国は世界中のあらゆる国々と関係を持っておりますが、今回は周辺国に限ってお話いたします。すなわち、テルマ、シャリフ、都市国家連合、そして教皇領についてでございます。

テルマ、正確にはトリグレス朝テルマと申しまして農業を中心とした北の大国でございます。帝国とはヌベス山脈を境に長年にわたる対立と共存が続けてきた、いわばライバルですな。軍事力は強大で、隙あらば南部への進出を狙っております。もっとも最近では20年ほど前に戦争がありました。帝国の外交のうえでもっとも注意を払うべき国と断言していいでしょう。

シャリフは帝国の内海である中つ海なかつつみの南側、セレスタ大陸北東部に位置する貿易国家でございます。かつてはセレスタ北部をその手に治めていましたが、セイディエス帝国の拡大にともない現在の領土まで縮小しております。しかし侮つてはいけません。優れた航海技術を持ち、現在も海上貿易の重要な担い手であると同時に、強力な海軍を有しております。また戦象部隊を主力とした陸軍の実力も確かなもので、国力自体はまだまだ衰えを見せておりません。

以上の2カ国とは対立関係にあるものの、経済的には切り離せないパートナーでもあるのです。各国の情勢を見つつ、いかに良好な関係が続けるかが焦点となっているわけです。

さて、少々おもむきが異なるのが都市国家連合です。テルマの西部、アトラス大陸の西端には数多くの都市国家、あるいは小国が存

在します。彼らは互いに争いつつも外部の敵に対抗すべく一種の連合体を組織しております。帝国とは、海とテルマ領に挟まれた又ベス回廊と呼ばれる幅数10キロの帝国領土を通して、わずかに国境を接しております。セイディエスとは基本的に中立を保ち、我々もすべての国と関係を持つてはなりません。連合内にもいくつも同盟が存在し、帝国とは、国境を接しているアリエス同盟とは国交を持つております。小国の集まりであるため、周辺の情勢に伴う変化が大きく一種のバロメータの様に見られることもあります。

最後に教皇領ですな。これは厳密にいうと国ではないのですが、帝国の存在理由でもあるゆえ非常に重要です。ミラ教の成立は今から約1000年前といわれております。この成立を紀元としているのが、現在我々の用いている「せいれき聖歴」でございます。今年は聖歴1003年ですね。

ミラ・ナヌスや精霊の存在は世界共通の概念として認められていたものの、当時は教義の違いから対立が絶えず、教皇様は自身とミラ教を守る「守護者」を求めたわけです。そして、「守護者」として任命された人物は皇帝を名乗り教皇領を敵勢力から守る役割を負うことになります。この1000年でいくつかの帝国が守護者となりました。ここ300年はこのセイディエス帝国ガルダン朝がその任を負っております。

当然のことですがいずれの国家もないがしろにすることはできません。将来国を支えるクロード様にはぜひとも必要な知識である、と申し上げておきます。では、次回は財政と貴族階級のお話をいたしましょう。

路地

ペイジンの路地裏の広場で赤毛の女の子が一心不乱に何かを組み立てている。どうやら投石機のミニチュアのようなようだ。

バルカがやってきて声をかける。

「リディア、なにしてるの？」

リディアは顔を上げると母親そっくりの快活そうな栗色の瞳でバルカを見て答える。

「このあいだエーベル先生が仕組みを教えてくれたから、面白そうだなって思っで。」

「へえ、あいかわらず機械好きだね。でも今は大砲があるから、投石機は使わないんじゃない？」

「そんなことないわよ。うまく使えばまだまだ現役だと思う。ようはその機械の性能をどう生かすかじゃないの？」

二人が他愛ない会話に興じていると、路地の角を曲がってエーベルが表れた。彼は教え子たちを見つけて声をかける。

「やあ、お二人さん。なにやってるんだい。ん？それは投石機かい？前に教えたやつだよ。リディアは機械工学に興味があるんだっかな。また今度話してあげるよ。」

ところでなんだけど、ワキール見なかったかい？ちょっと聞きたいことがあるんだけど。」

「私、今日は会ってないわ。いつもの子たちと水路に行ってるんじゃないかしら？」

「僕も見えてないです。昨日はお父さんに診てもらってたみたいだから、もしかしたら具合悪いんじゃないですか？」

「そうかあ、家にはいなかったけど具合悪いなら遊んでるわけでもないのかな？まあいいや、そのうち出会うでしょ。」

そんなことより、二人とも昨日は大丈夫だった？なんか大聖堂で

大変なことがあったらしいけど。」

「僕らは大丈夫でしたけど、大勢けが人も出たし、ガムザさんが焼け死んでしまったんです。」

「らしいね。なんでも全身炎に包まれた男が抱きついたとか。」

「みんな悪魔の仕業だ、なんて言ってたわ。」

「まあ、精霊がらみだろうね。とにかく君たちに何事もなくてよかったよ。」

それからもう一つ。バルカ君、昨日からお父さんの所にお客さん来なかった？」

「今日の朝、誰かに会いに行つたみたいでした。どうかしたんですか？」

「いや、ちよつとね。もしかしたら、奇跡的に知り合いがきてたりしないかなあ、とか思つて。」

エーベルが行つてしまうと、バルカはリディアに話しかける。

「エーベル先生、なんか変じゃない？絶対自分から人探したりしない人だと思つてたのに。」

「なにか事情があるのよ、きっと。奇跡とか言ってたわね。大変なことなのかしら。」

「そう言えばワキールを探してるって言ってたし。あの子、予言者なんだよね。先生は奇跡を待ってるのかな？」

「そうかもね。先生に奇跡が起こるといいわね。」

リディアの言葉を聞いて、バルカが難しい顔をする。「どうしたの？」とリディアが尋ねると、バルカは真面目な口調で話し始める。

「僕、正直言うと奇跡ってあんまり好きじゃないな。昨日の事件もある意味奇跡でしょ？みんながよろこぶ奇跡つてのは実は意外と少なくて、たいていどこかで誰かが悲しんでるような気がするんだ。奇跡が起こつちやつたから、今までの努力が無駄になった人とかもいると思うんだよね。そう考えると、僕は神様のことあんまり好きじゃないや。」

「うーん、そういう話は私よくわかんないや。でも実際、神様はいるし奇跡も起きるんだから仕様がなないよ。だけど、どう考えるかは自由でいいと思うよ。」

広場に面した扉が開き、10歳前後の年齢のわりには背の高い男の子が出てきた。浅黒い肌に黒髪、彫りの深い顔の奥で黒い瞳が光っている。ワキール・アブド・アル・アドルは典型的なシャリフ人の見た目をしている。貧民街に暮らしているにもかかわらず非常に身なりは整っている。ワキールの家はもととシャリフの名門だったが、わけあって今はペイジンストリートで暮らしているらしい。バルカとリディアは広場に現れた彼を見ると、話をやめて駆け寄った。すぐさまリディアが口を開く。

「ワキール、どこ行ってたの？エーベル先生が探してたわよ。」
ワキールは心なしかうれしそうにこう言った。

「今日は聖堂に行ってたんだ。昨日は大変だったみたいだけど、どうしても確認したいことがあってさ。俺、昨日バルカのお父さんに頼んで、今日修道士と会わせてもらえることになってたんだ。」

「そうだったんだ。で、何を聞きたかったの？」

「うん、俺の能力についてなんだ。このあいだ、前に話したのと同じ夢を見た。で、昨日、訳の分からない事件で人が死んだ。俺の夢と奇跡が関係あるような気がして、それでちゃんと確認しようと思ったんだ。」

「で、結果はどうだった？」

「まだ、はっきり決まったわけじゃないけど、どうも神様の”足音”が聞けるみたいなんだ。その修道士さんの予想では、一回目の夢は俺がその能力に目覚めるって奇跡、二回目は昨日の事件なんじゃないか、って言ってた。で、もう少しすると、もっとはっきり能力が使えるようになるらしくて、夢じゃなくてリアルタイムに”足音”が聞けるようになるはずなんだってよ。」

「スゴいじゃない、ワキール。そしたら、奇跡が起きるときは私に

も教えてよね。」

「わかったよ。じゃあ、俺、エーベル先生探しに行くから。」

ワキールがいなくなると、広場は再び二人だけになった。リディアはバルカにこう言った。

「ワキールの奇跡は誰かを不幸にした？ワキールが悩んでたの知ってるし、私たちともうれしいじゃない。案外奇跡って悪くないと思うよ。」

ブレノ博士の政治学講座―その3

ガムザ司教がお亡くなりになって以来、何やら物騒になりましたな。貴族間の抗争は未だ表面化そこしておりませんが、すでに使用人の殺害事件等も起きているようですし、いやはや何とも……、おっと、つい余計なことを……。

では、気を取り直しまして、今日は貴族と財政のお話でしたな。

貴族をどのように定義するかは国により様々ですが、帝国では少々変わった制度で成り立っております。セイディエス帝国は多民族国家ゆえ、基本的に身分などというものは存在しえないのです。つまり、平民であれ貴族であれ持つている権利に違いはないわけです。そのため、その気になりさえすれば平民でも貴族になることが出来るわけです。では、皇族や貴族というのは何かと申しますと、「国土と国民の管理者」というのがもっとも簡単な説明になりますようか。皇族は国全体に、そして貴族はそれぞれの管轄において責任を負っていることになります。

貴族の仕事は各々の管轄における住民の統治と税金の徴収が中心です。帝国は長年多くの国を吸収して拡大して参りましたので、かつての王などが貴族として組み込まれる場合がほとんどです。貴族の身分は領土とセットですので、基本的に新しい領土が生まれない限り国内の貴族の数は変わりません。正規軍の者はみな最下位の騎士階級にあたり土地は持ちません。以下は世襲が認められており、男爵（農村担当）、子爵（地方都市担当）、伯爵（地方担当）、辺境伯（国境担当）、侯爵（州担当）、大公（州担当、皇族）と階級が上がっていきます。帝国軍の将軍は各州の統治をまかされていますので、必然的に大公か侯爵の身分である必要があるわけです。そう言う意味では確かに身分の差というものは存在することになりますな。今のシステムで平民が将軍になるのはほぼ不可能と思ってよ

いでしょう。ただし、宰相や大臣、警邏、親衛隊はその限りではありません。こちらは能力次第と言ったところででしょうか。

では続いて財政のお話ですが、税金の徴収は各貴族が行うということはすでに申しました。全体の財政方針、用途などは大蔵大臣が責任者となります。そして、実際の管理はおおむね将軍に委ねられます。例えばガルディア州であれば帝国軍第一軍の管轄ですので、そこで集められた税金はアベル・ガルダン将軍が運用することになります。ただし、何にどれだけ使うか、と言ったことは六将会等で綿密に話し合いを行いますので勝手はできないわけです。

現在のところ財政は非常に良好ですな。貿易を中心にいずれの産業も他国に勝る水準を維持しておりますし、ファビオ様は非常に儉約家ですから。財政は盤石と言ってよいでしょう。

では、今日はこの辺りにしておきましょう。次回は産業のお話をいたそうと思います。

使者

ナヴィアスの北、郊外を少し行ったところに見晴らしのよい小高い丘がある。丘の上には、帝都を見下ろすように大きな屋敷がそびえ、夏の到来を思わせる強い日差しにその白い外壁を輝かせている。まぶしいばかりの外観とは対照的に庭には多数の樹木が涼しげな木陰を作り出し、その根元は、トケイソウの独特なかたちをした花によって彩られている。

男が一人、屋敷のテラスに現れる。中背の太った男で、頭は禿げ、かつ色の肌に小さいがぎらつく目、商売人らしいエネルギーな容姿の男である。貿易を生業にする者なら、誰もがその容姿でジャック・ヒエタミエスとわかるだろう。現流通大臣にして、元老院議長、そしてなりより帝国を代表する富豪である。15年ほど前、当時から有力財閥であったヒエタミエス家に婿養子として迎え入れられて以来、手段を選ばぬやり口で財閥を飛躍的に大きくした男だ。しかし、成功の一方で妻は四年前に他界し、現在は7歳になる娘が唯一の家族となっている。

男の出現を見計らったように、木立から女が姿をみせる。全身黒ずくめの小柄でスリムな体系だが、目つきの鋭さから真つ当な世界の人間ではないことがわかる。女は低い声でヒエタミエスに話しかける。

「先生いわく、『警邏隊長が今回のことについて嗅ぎ回っているようだ。わかる範囲で行動を調べろ』、とのことだ。」

あいさつも無しに用件のみを伝える。ヒエタミエスは「わかった。」と返事をし、気になることを尋ねてみる。

「ガムザ司教の死に先生は関係があるのか？燃える人なんぞ普通にはあり得ん話だぞ。」

「あたしらも先生については何も知らない。アンタとおんなじさ。」

うちの組織にアンタとの仲介を頼みにきた、それだけだよ。だいたい、あんな情報だけでどうしよってのさ。」

「それは、何でも情報を、というからだな。宮廷の人と手紙の出入りだったか。流通大臣としてわかることはその程度のことだ。先生は私を個人的に知っていると言っし、私の願いをかなえてくれるという約束だ。要求には応えているぞ。」

「ただな、何も関係がないならなぜそんなことを知る必要があるのだ？」

「何度も言わせるな、何も知らない。アンタとこちらは長い付き合いだが、先生だってあたしらの客なんだ。客の情報は売れないよ。気になるなら自分で調べな。」

「そう言い残すと、女は再び木立の中に消えてしまった。」

一人残されたヒエタミエスは事件について考える。「先生とは誰のことだろうか？私の願いを知っていて、それを叶えることを条件に情報を求めてきた。」

「願いか……、私の願いを叶える自信があるというなら、なにか超常的な力が使えてもおかしくはない。受言者か？あるいはもつと別の何かだろうか？不可解だが、今はこの得体の知れない人物にかけしてみるのも悪くないかもしれん。もしかすると、神が我らの正義に味方してくれているのかもしれないな。」

彼がそんなことを考えていると、玄関の方から使用人がやってきて来客を知らせる。

「ご主人、ルグラン將軍の使いの方がお見えになりました。こちらにお呼びしますか？」

「いや、客間に通してくれ。すぐ行くから。」

「かしこまりました。」

ヒエタミエスが客間のドアを開けると、ルグラン將軍古参の使者

がソファに腰掛けていた。老年にさしかかろうかという、小柄だが抜け目のなさそうな人物である。彼はヒエタミエスが入ってくるのを見ると、起立して館の主を迎える。

「お久しぶりです、カミ口様。お見受けしたところ、景気は上々といったところででしょうか？」

「昔の名前で呼ばんでくれ。だいたい、はじめてアンタに会った時はろくな知らせじゃなかったからな。で、今日はどんな重要案件なんだ。」

「ハハハ、これは手厳しい。確かに、私が出て参りました以上、我が君にとって重大な関心事であることは間違いありません。しかし、今回はお知らせするためではなく、教えていただくために参ったのでございます。」

「ほう、さしずめ今回の事件のことではないのか？」

「ご明察！しかしそれは用件の半分ですな。ガムザ焼殺に関して判明していること、そしてもう一つは宮廷内の勢力関係でございます。」

「なるほど、勢力争いの激化を見越してリサーチしておこうというわけか？」

「おっしゃる通りでございます。お調べするのにお時間がかかるようでしたら後日おうかがいしますが？」

「いや、大丈夫だ。最近似たような頼みがあつてな。おまけとしていろいろわかったこともある。まずガムザについてだが、まだ詳しいことはわかっていないらしい。どうやら精霊がらみである、ということと言われているがな。また、理由についても不明だ。ルイ様を狙つてのことならば容易に説明がつくのだが、そうでもないようだ。いずれにせよ、ルイ様の誕生を快く思っていない者が起こした事件ということだろう。」

後は勢力の話だったな。クロード様、ルイ様、双方に派閥が出来つつはある。が、今のところ目立った動きはない。もう少し様子を見なければ勢力関係ははっきりしないだろうな。ただ、少し気にな

るのはオレフィスの連中だ。まず、クロード様の母上マリア様だ。ここひと月で三度ほど実家に手紙を書いている。今回の件との関係は不明だが今月だけやけに多い。そのうち一通はクロード様の乳母宛のものだった。そしてなんと、この乳母が昨日殺された。”乳母”といってもマリア様は子育てはすべてご自分でなさっていたから、まあ、養育の手伝いをしていた女性ということになるかな。クロード様が成長され、殺されるまでは帝都にあるオレフィス家の別邸で働いていたらしい。こちらでも詳細は未だ不明だ。

次に、彼女の兄でオレフィス家当主でもあるラザール・オレフィス將軍だ。オレフィス家は多くの権力者を輩出する名門家系であるがもとも中つ海西部を治める王族だった。彼らが私設軍を持つことは有名だが、王族であつた経緯から軍のレベル自体は相当なものであると予測がつく。裏の情報筋によると、今週に入つてオレフィス家から大量に武器の発注が出ているらしい。これが本当なら、なにかあると思つて間違いないだろう。”

「なるほど、なるほど。よくわかりました。近々またお訪ねするかもしれません。」

そういつと使者はおもむろに立ち上がった。ヒエタミエスは若干拍子抜けして彼に尋ねる。

「ほんとにその程度でいいのか？もつと根掘り葉掘りきくのかと思つていたのだが？」

「自分で言うのも妙な話ですが、私は優秀なメッセンジャーです。しかし、優れた政治家や軍師ではありません。今回はすでに、あなたに必要な伝言を伝え、あなたから必要な情報を受け取りました。これ以上は職務の範疇外です。」

「そうか……、さすがに長年あの方に使っているだけのことはある。レオン・ルグランという男は職務に忠実な者を好むからな。」

「そういつことです。それでは失礼いたします。」

使者が去ると、ヒエタミエスは応接間に独り残された。ヒエタミ

エスは考える。「もと王族で私兵を持つという点ではオレフィスもルグランも同じだな。彼らの動向も気になるところではある。が、今はカーランド隊長のことを調べなければならん。他人の心配よりも自分の身の置き場を考えなければ……。」

邸宅の門が開き、馬車が都に向かって走り出す。流通大臣は仕事に向かうようだ。

迷宮

警邏隊長ダスティン・カークランドは悩んでいた。この不可解な迷宮から抜け出す糸口さえ見つからずにいた。ボウガンの男は未だ捕まらず、追跡した第十一分隊の3名は行方不明、ガムザを殺した炎の男、次の標的、黒幕、いずれも不明。これだけでも頭が痛いにもかかわらず、さらに追い討ちをかける事態が発生した。ガムザ司教殺害の翌日、今度はオレフィス家の使用人が殺されたのだ。しかもクロードの乳母である。

彼自身現場には足を運んだ。彼女はオレフィス家別邸から少し離れたところに18歳になる息子と二人で暮らしていた。ラベンダーの咲き乱れる畑、その畑に囲まれた小さいが素朴で趣味の行き届いた一軒家、彼女はその門の前で変わり果てた姿で発見された。死体には刀傷、それも野太刀のような大きな得物で切られたと見られる傷が刻まれていた。肝臓、肺、心臓といった複数の急所をただの一刀で切り裂かれたようだ。かなりの手だれの犯行と思われるが詳細は不明である。

日中は数々の捜査で暮れていった。乳母殺害の日の夜は、『ブライト』でヴァレストと会った。前日、店の主人に仲介を頼んだのだ。話の内容からは何の成果も得られなかった。が、ダスティンはある種の感触を得ていた。「彼は何らかの事情を知っている」、そしてそれ故に「彼は安全である」ということだ。

ダスティンの「過去クロード様の出生に関して誰かから何らかの圧力を受けましたか?」という問に対し、彼は意味深な返答をした。「立場・上、『そういったことはございませんでした』、とお答えします。」

と、彼はそう答えた。この時点でダスティンの頭には3つの可能性が浮かんでいた。すなわち「彼は身の安全と引き換えに何かを口止

めされている」、「別の事情で答えられない」、「彼は事件の関係者である」というものだ。発言内容の真偽は問題ではない。そういう答え方をした時点で何かを知っているはずである。他に特別な事情があるのならば、それ自体が口止めの役割を担っていることになる。また、仲間ならば狙われること自体があり得ない。どちらにしても彼は暴露しない限り安全と考えてよい、ダスティンはそう判断したのだった。

そして今日、彼は後宮を訪れた。一晩考えた結果、バラバラだったパズルのピースにかすかなつながりを見いだしたのだ。まだ仮説にすぎないそれは、しかし何の手がかりも見つけられない今の彼にとっては唯一の希望であつた。

ダスティンは後宮の一室で皇帝第三妃マリア・オレフィスと向かい合う。彼の仮説の証明には、彼女の証言が絶対に必要であつた。マリアは警邏隊長の突然の訪問に少々戸惑っている様子で、美しい顔にかすかに困惑の表情を浮かべている。ダスティンは椅子から少し体を乗り出すと、静かな口調で話しはじめた。

「本日こちらに参りましたのは、最近立て続けに起こりました事件についてお話をうかがうためでございます。お答えになれる範囲でよろしいのでご協力願えますか？」

ダスティンは、一瞬マリアの顔が曇るのをみとめた。彼女はすぐに表情を戻すと話しはじめる。

「ガムザ様のことは残念でございました。私もクロード出産のおりにはお世話になりましたから。それから、昨日は乳母が……。」

乳母のことを思い出し、マリアは涙で言葉を詰まらせる。

「マリア様、心中お察し申し上げます。が、質問にはお答えいただきます。単刀直入に申し上げます。乳母の息子さん、つまりクロード様の乳兄弟ちきょうだいに当たる人物は今どこにいますのですか？」

マリアはうつむいてしまい動かない。やがて消え入るような声で一言、「知りません。」と答えた。

ダスティンは続ける。

「では、今月に入り乳母の家に手紙を出されたようですが、どういった内容ののですか？」

今度もしばらく間があり、彼女は口をひらく。

「たいしたことは書いていません。他愛のない手紙で、時々そういった手紙をやりとりしていました。」

「なるほど。では手紙を出された2日後に息子さんが宮廷を訪れていますが、どういったお話をされたのですか？」

「……彼とはあいさつ程度の話しかしておりません。彼はたまにクロードと話をしに来ます。たまたま時期が重なっただけなんです。」

「クロード様とは7歳差ですか。二人はどういった関係なのですか？」

「クロードにとっては兄のようなものだと思います。よく、町の子などを教えてもらっているようです。」

ダスティンは彼女の様子を見て「話しぶりから、嘘をついている様子はないな。」と判断し、核心に迫る質問を投げかける。

「それでは、ここからが本題です。いったいいつ私の部下を抱き込んだのですか？」

マリアは明らかに驚いた顔をした。

「何のことでしょうか？私が？いったい何を根拠に？」

「そもそも、帝国の人間ではない司教を、個人的に護衛するということが自体が異常なんですよ。我ら帝国軍の使命は帝国とミラ教の保護ではあっても、ガムザ司教の保護ではないのです。一応、特例としてそのような措置をとってはいますがね。」

「ですが、だからといってなぜ私が？」

「この際申し上げますが、私はクロード様には何やら特別な事情があるらしいことを聞き及んでおります。司教護衛の措置がとられたのがおよそ10年前、クロード様誕生後すぐにはじまりました。そして、もっとも皇子の成長を案じ、軍の派閥に関係がなく、なおかつ秘密裏に手を回せる人間、そんな者はほとんどおりません。私の

知る限りではそれこそ一人しかいないのです。」

彼女はダステインを見つめたまま、じっと押し黙っている。

「この事実だけでマリア様をどうにかしようと言っわけではありません。ただ、今回の事件は非常に複雑なのです。認めていただけるだけでいいですよ。」

マリアは観念したのか震える声で話しはじめる。

「わかりました。おっしゃる通り、事情により警邏隊の方に無理を聞いていただいたんです。それ以上は本当に何もしてないんです。」
彼女は訴えるような目を彼に向けた。

「わかりました。今日聞きたかったことは以上です。今までの会話はおたがいに他言無用でお願いします。いろいろと不仕付けなことばかりうかがって申し訳ありませんでした。」

その夜、ダステインは自室で今日の出来事を整理する。

「事態は少し前進した。そして、おそらく僕の仮説は完全に間違いというわけではなさそうだ。昨日考えたのはこうだ。

1、ボウガンの男は乳母の息子である。

2、オレグ・ガムザの護衛2名はマリア・オレフィスの手駒である。

3、息子はダミーで、護衛がルイ・ガルダン・ガルダンもしくはオレグ・ガムザ暗殺を実行する予定であった。

4、炎の男の出現は誰にとっても想定外であった。

5、黒幕はマリア・オレフィスである。

それぞれ推測の理由はこうだ。

1、調査からわかった年齢、容姿の類似と、今回の事件と乳母の死は関係がある可能性が高い。

2、よくよく考えてみると、なぜ護衛が必要なのか明確ではない。皇子の誕生と開始時期が重なる。

3、ウェイさんの話「ダミーで注意をそらす狙い」。あの人の話は聞いておくもんだ。

4、奇跡としか思えない。意図して引き起こすのは不可能ではない

か。

5、ヴァレスト先生のようすから、仕事上関係の深い人物ではないか。また1、2、3の理由から。

1、2、3については可能性が高まってきたな。もう少し調べる必要がある。5は今日の様子では違うような気がするが、予断は禁物だ。4は手のつけようがない。それこそ奇跡的に手がかりが見つかるまでは保留だな。」

思考の闇はまだまだ深い。しかし彼は一条の光を見つけたのだ。後は自分を信じて邁進するのみである。この迷宮を抜け出すために。

エーベルによる短い講義―その4

お、リディアちゃんだね。いらっしやい。また機械の話かい？実を言つと結構ネタが切れかけてるんだよねー、俺本来は経済専門だし。たまには、機械工学以外の分野にも目向けてみない？なに、「おもしろそうね！」ってか？そりゃよかった！つつうわけで今日はここセイディエスの科学技術のお話だ！

前もちよつと話したけど俺たちが使つてる科学技術のいくつかは受言者なんかの協力で生まれたもんが結構ある。で、当然ながらミラ教のお膝元であるセイディエスは一番その恩恵にあずかつてるわけだ。権威、面積、経済、そして科学技術までも世界一！いやー、こんだけ一番だらけなのも珍しいよね。その中でも特別進んでるのが化学と機械工学だ。

まずは化学。物質の性質を探るって意味では一番精霊と関係ある分野だな。発明はいろいろあるけど何といつても火薬がダントツだ。爆弾や大砲の出現は戦争のスタイルまで変えちゃったからねー、ほんと大発明だ。

で、もう一つが君の好きな機械工学。これは他国には類を見ないほど発展してる。特に歯車の利用とゼンマイの発明は大きかったんだ。これで何が出来るか、という時計がくれる！国内でも超高級品だけど、他の国ではつくれないから輸出するものすごい値段になるんだ。他にも、バネやネジなんかも帝国の発明品なんだよ。科学技術ってのは、こうして発明したものをみんなの役にたてるために発達するもんだ。例えば活版印刷って技術がある。これで本をいっぺんにたくさんつくれるようになった。同じようにいろんなところで技術は使われてんだ。

まず鉄鋼業だ。金属を加工するだけなら大抵の国はできる。この国のすげえところは磁石をつくれるところだ。船につける羅針盤な

んかは帝国の専売特許みたいなもんだ。

そして、鉄を溶かして加工する技術を生かして発達したのがガラスやレンズの製造だ。聖堂にステンドグラスがあつたろ？あんだだけレベルの高いもんは、やっぱここでしかつくれないんだ。それからレンズだな。船なんかでつかう望遠鏡が代表だ。後、この辺じゃ、あんまり見かけないけど、学者や政治家なんかにはメガネをかけてる人がいる。砂漠ばかりのワステイ州では日射しを避けるためにサングラスなんていう色付きレンズのメガネをかけてる人だっている。もつとも、このサングラスは若い貴族やお金持ちがおしゃれでしてたしするんだけどね。どっちにしても高級品だ。

でもまあ、こういうのは全部そのうち誰かが発明するかも、って感じでしょ？実は一つあるんだよ、絶対にセイディエス以外では出来ない発明が！”カメラ”ってのがそれだ！知らないだろ？当然だ。発明されたのは2年前、とてもじゃないけど実用化はまだまだ先だろうね。で、こいつは何をするものかというと、なんと！レンズに映った景色を板や紙に写し取ることが出来るんだ！つまり、リディアちゃんにレンズをむけると、数分後にはリディアちゃんがそっくりそのまま写った紙が出来上がるわけ！これはすごいよ。はじめて聞いたときは嘘かと思っただくらいだよ。

こういうふうに、化学だ機械工学だいっても、ほんとにすごいものや役に立つものをつくらうと思つたら、それぞれの分野を越えて協力しないといけないんだ。だから君もほんとに機械工学が好きなら、逆にいろんなジャンルに手を出してみるべきだと思うよ。

「先生は誰からカメラの話聞いたの？」ってか。実を言うと機械工学の研究者と知り合いなんだ。シライシって人なんだけどね。もう少し大きくなって、まだそういうことがやりたいと思ってるならそのときは紹介してあげるよ。

んなわけで今日はここまで！詳しくはアキ・シライシ編『白石堂発明カタログ』を読むべし！

暗闇

薄暗い部屋に男が4人、小さなテーブルを囲んでたたずんでいる。テーブルに置かれた口ウソクのわずかな明かり以外、周囲を照らすものはない。廃屋の一室なのか壁がところどころはがれている。総じて家具は埃をかぶり、何とも陰鬱な雰囲気漂わせている。廊下から足音が響く。やがて、ドアの外れた部屋の入り口にマントで全身をおおった男が現れる。やせた男だが、暗闇にまぎれてそれ以上の容姿は判断できない。

男はテーブルから少し離れた暗がりです足を止めると、テーブルを囲む男たちに向かって話し始めた。

「首尾はどうだ？ 報告を聞かせてもらおう。」
男の一人が口を開く。

「まず、警邏隊長の件からだ。大臣の報告では昨日後宮に行った以外、目立った動きは無しだ。まあ、オレフィス家で殺人事件が起こったんで、そっちには顔出したみたいだけだな。司教焼死事件も未解決だったので忙しいみたいだが。」

別の男が報告を次ぐ。

「二つ目は乳母の件だ。さっきのでわかったとは思うが成功だ。ジヨーはいつも通り仕事をした。あの男のことだ、ヘマはやってないだろう。で、これが言われていたものだ。」

そう言う男は懐から手紙をとり出すとマントの男に投げてよこした。足下に落ちた手紙を拾い上げると男は静かにうなずく。

「ご苦労だ、今回もよくやってくれた。では、引き続き次の依頼を受けてくれ。」

テーブルの男たちは顔を見合わせる。リーダー格らしいガツシリとした男がためらいながらも尋ねる。

「先生、アンタには実際感謝してるよ。俺たちラヴェリータファミリーがここまで大きくなれたのは先生のおかげだ。だからアンタが

何も聞くなというなら何も聞かなかったし、今回の依頼にしたってそのつもりだった。だがな、宮廷の様子調べたり、クロード皇子の乳母殺したり、コイツはいつたいなんだ？何をしようとしてるんだ？次の依頼にしてもそうだ。俺たちも毎回それなりのリスクを負って仕事してんだ。これ以上文句言わずについてこいってのはちよつと無理な話だぜ。」

マントの男はしばらく考えていたようだが、やがて結論が出たのか一歩前へ踏み出した。

「いいだろう、少し話してやる。これは大いなる挑戦なのだよ、神と世界に対するね。君たちの成功もそのための準備に過ぎん。いわば実験だ。ただし、勘違いしてくれるなよ。実験と言っても単なる確認作業、結果はわかりきっていた。今回のこともそうだ。必ず成功する。だから今度も信用してもらいたいものだね。」

リーダーは再び問い返す。

「実験だかなんだか知らねえが、別にアンタを信用しないわけじゃない。ただ、得体の知れない仕事ってのはやりにくい。その『神と世界に対する』挑戦とやらについて教えてくれないか？」

「ではヒントを与えてやる。後は自分たちで考える。私がはじめて依頼をしたのはルイ皇子誕生直前、そして必要な情報は宮廷の内部事情、殺したのはクロード皇子の関係者。そしてもう一つ、これはあなた方には言っていないことだが、ルグランの手下が動いている。そして最後のヒントは神の奇跡だ。これらをつないだ線の先に答えがある。」

では、次の依頼だ。ガルダン家の使用人を殺せ、だれでもいい、人数も問わない。それから、この手紙をヒエタミエスに渡せ。宛名くらいなら見てもいいぞ。以上だ。今度もぬかりなくやれよ。」

マントの男はそう言って手紙の入った封筒を投げてよこすと真つ暗な廊下へと消えていった。

残された男たちもやがてそれぞれ闇へと消えていった。深夜の廃

屋に人影はなく、夜は更けていった。

エーベルによる短い講義―その5

ワキールにバルカ、待つてたよ。もう親御さんから話は聞いてると思うけど、将来のことも考えさ、ちよつと相談があるわけよ。

君たちは大人になったら何になりたいんだい？ふむふむ、ワキールは商人でバルカ君はまだ決まってるのか。どっちにしても、だ。君たち二人はこの辺りの子どもたちと比べると段違いに勉強ができる。まあ、シャリフの元貴族と宮廷医師の息子だから当たり前と言えはそうなんだけどね。

で、俺としては君たちにちゃんとした環境で勉強して欲しいと、そう思ってる。そうすると、ここで勉強を続けても限界があるんだよ。そこで俺からの提案だ。二人にはアリウスに行ってもらおうと思う。名前くらいは聞いたことあるだろ？帝国名物の一つ、教育都市アリウス。でもまあ、行ったことないんじゃない？いまいちイメージわかないよね。つつうわけで今日はアリウスについて教えることにする。

帝国を東に行くと中つ海の北にウエルテス海つつう内海が広がってる。でコイツと中つ海をつないでるエニス海峡にあるのがアリウスだ。ここは昔から北部との貿易の拠点だったんだけど、いつのころから各地の学者が集まってくるようになった。まあ、地理的に物資も情報も手に入りやすいからだろうね。で、ご高名な先生方もたくさんおられるわけだ。先生がいるところ生徒が集まるのが自然の流れだよ。いっしかアリウスは研究と教育の街として有名になつていったんだ。

まあ、世に言う知識階級のインテリどもはみんなここで勉強してると思うよ。かく言う俺もここで経済の基本を学んだわけ。もう20年も前の話だな、まったく、歳はとりたくないよ……。おっと、話をもどそう。そう言うわけで、貴族や商人、弁護士、政治家、医

者などなど、そういったところの子どもたちや、将来そんな職業に就きたい子たちがたくさんいるところなんだ。年齢は結構バラバラだね。研究者目指してる人なんかはずっとその街で暮らすやつなんかもいて、10代の若いのはっかりじゃなくおっさんも多いんだよ。次は実際にどうやって勉強するかだな。俺みたいに知ってることなら何でも教えてくれる先生なんて、むこうじゃほとんどいないから注意が必要だ。自分のやりたい勉強を見つけて、条件にあった教室を探さないといけない。場合によっては一日にいくつも教室を回る必要もあるんだ。面倒くさいけど、いろんなことちゃんと学ぶためにはこれが一番だ。生徒たちは大抵どこかの寮に入ることになる。ここには担当の先生がいてどんな勉強が必要とか、この教室がいかとかアドバイスや相談をしてくれる。生徒は年齢も出身もバラバラだから、それぞれ個別に対応する必要があるわけだ。寮によってはある程度出身や職業なんかを制限するようなどころもあるから入る場合はよく見ておかないといけない。

それから、アリウスで学べるのは勉強だけじゃない！貴族なんかは将来、軍人として活躍するような人も多いわけだから武術は必須だ。で、この街には道場が山ほどある。剣術から格闘まで、大概のことはここで習得できると思うよ。伝説的な達人なんかも結構いるからレベルは高い。

さらに、学者と同じくらい技術者と呼ばれる人たちもいる。発明品や実験機器の製作を請け負う専門家だ。いろんな分野の技術者がいて、これを目指す子たちはそれぞれの工房に弟子入りして技術を学ぶ。彼らは帝国の技術を支える基礎だからね。そういう人たちもアリウスから輩出されていくんだ。

どう？少しは興味わいた？まあ、行くことになっても実際勉強し出すのはしばらく先の話だからゆっくり考えな。んなわけで今日はここまで！参考文献は思いつかん！

慧眼

ノックが二回、執務室のドアが開くと少し疲れた顔のカー克蘭
ド警邏隊長が立っている。宰相ウエイは書類から目を上げて彼を迎
える。

「やあ、しばらくだね。少し調子が悪そうだ、ま、掛けなさい。」
促されるままにダスティンは来客用のソファに腰掛ける。いつも
のはつらつとした様子ではなく、グリーンの瞳も沈んで見える。ウ
エイは続ける。

「どうやらいろいろとお困りの様子だな。私が余計な負担をかけ
ている部分もある。よかったら話しなさい。なにかアドバイスがで
きるかもしれん。」

ダスティンは少し間を置いて、ことの次第を報告する。

「もう何がなんだかわかりません。ガムザ司教の焼死以来、状況が
全く見えてこないのです。いや、正確には言えば、少し希望が出て
きたところで再びどん底に突き落とされたような感じです。」

「なるほど、それはアレかね。今朝方報告が来ていたガルダン家の
使用人殺害のことかな？」

「はい、オレフィス家の乳母殺害事件に続いて、翌日にはガルダン
家の者が五人も殺されました。報復と見るのが妥当なのでしょうが、
かなり気になる点がありました……。」

「ふむ、犯人の得物が同一である可能性が高いと言うことだろう？
つまり、同一犯である、と。」

「その通りです。しかも、暗殺にあれだけ大きな刀を用い、なおか
つそれを正確に振るう者となると、我々の知る限り『ジョー』と呼
ばれる人物以外考えられないのです。彼はワイミ―地区に拠点を構
えるマフィア、ラヴェリータに飼われている用心棒らしく、かなり
の数の殺人事件に関わっています。ですがきわめて仕事が速く、な
おかつ非常に正確にこなすため未だ足取りを掴むことさえ出来ませ

ん。

また仮に、彼の犯行だったとしてもマフィア側の意図が読めません。国の体制が揺ればそこにつけ込む余地が生まれる可能性はあります。しかし、わざわざこの時期から介入を行うというのも少々不可解に思うのです。それに、どうせやるならもつとバレないような工夫があつてしかるべきだと思うんです。」

「君の読みは概ね正しいように思うな。では思い切つてこう考えよう。犯行はマフィアだが、黒幕は別にいる、と。」

「あの……、もう少し具体的にお願いできますか？」

「よかろう！ではその前に君の知っていることを全部教えてもらおうか。」

ダスティンはウェイに知っていることを洗いざらい報告した。もちろんマリア・オレフィスとの会話でもある。

報告を聞き終えたウェイの顔は心なしに明るく見えた。彼ははざんだ声でダスティンに語りかける。

「なるほど。いや君！なかなかよくやってくれているよ。私は非常に満足だ。これで私の仮説がほぼ正しいことが証明された。今から話してあげよう。ところでカーランド隊長、君は”魔術師”についてどれくらい知っているかね。」

「はあ……、学生の頃、宗教の授業でかじった程度ですが。何でも『神を自らの目的のために利用する背徳者であり、異端である』とか。急にどうしたんですか？今回の件とおとぎ話がなにか関係あるんですか？」

「それだよ、多くの人は魔術師と聞くと昔々のお話だとか、おとぎ話だとか言つて、勝手に『今はない』と思いついでいる。私も以前はそうだったのだが……。これは現皇帝の王位継承に関わつておらん人間はほとんど知らんのだが、20年前に魔術師が出現しているのだよ。公にはされていない事実だ。詳しい話は別の機会にするでしょう。」

では本題だ。君は『傾^{けいこく}国の魔術』という言葉聞いたことがある

だろうか？」

「いいえ、『傾国』というのは確か『国家を傾けるほどの美女』と言った意味だったと記憶していますが。まさか魔術で国を滅ぼすんですか？」

「まさにその通りだ！古の記録に、東方の国王が美女に現を抜かし、結果的に国家を滅亡させてしまったというものがある。これは魔術師どもの考える最高峰の魔術なのだ。一個人が奇跡を持って国家を転覆する。確かに最高と言えそうなのだろう。彼らにとっては神さえも研究対象だ。国を滅ぼすのも知的好奇心からくる一種の実験なのだろうな。」

「そんなことが……、私はてっきり魔術というのはもつと超能力を使ったりするものだとはかり思っていました。」

あの、つまり、ウェイさんは黒幕は魔術師だと言いたいのですか？」

「いや、それはまた少し違う。ではそろそろ具体的な話をしよう。まずガムザ司教焼殺事件からだ。君の予想はほぼ正しいと思う。まず、マリア様は確実にルイ様を殺そうとしていただろう。護衛は完全に彼女の手駒であるとみて間違いない。ヴァレストさんの言動からして、ルイ様誕生の折にマリア様との間に何かあったのだろうな。しかし、結果として亡くなったのはルイ様ではなくガムザ司教だった。そして、クロード様の乳兄弟、ボウガンの男、そして炎の男は同一人物と見て間違いない。ここに魔術師が絡んでくる。が、それは後にしよう。」

次に起こったオレフィス家乳母殺害事件についてだ。これはクロード様に関する情報集めが目的だろう。報告書によるとマリア様からの手紙は見つかっていないようだね。おそらくこれが目的だろう。ついでに乳兄弟に関する口封じも行った。

そして昨日から今日にかけて起こったガルダン家使用人殺害事件。もちろん対立を煽る、報復に見せかける、という目的がある。だが少々違和感がある。これはおそらくわざとだ。一連の事件をマフィ

アによる茶番に仕立て上げる。世間の注目を浴びなくなること動きやすくなる者がいる、ということではないのかな？」

「……それが、魔術師だと……？」

「それだけではない。他のものはどうか知らんが、私の目を欺けると思つたら大間違いだ。宮廷外部の者が絡んでいるとすると、まず流通大臣のジャック・ヒエタミエス。彼とラヴェリータの関係は長らく噂されている。今回の件に関して敵側の情報源である可能性が最も高い。そしてレオン・ルグラン將軍との関係も深く要注意人物だ。だが、彼はあくまで情報の仲介役だ。いわば茶番の片棒を担がされているに過ぎん。」

黒幕は別にいる。魔術師とは無関係にな。」

「では、その黒幕とは？」

ダスティンはウェイの口から語られる仮説の理路整然さに内心舌を巻いていた。「この人は僕のあの程度の情報からどうやってここまで考えたんだろうか？」

ダスティンがそんなことを考えていると、ウェイは突然小声になった。顔を近づけて、やっと聞き取れるほどの囁きである。

エーベルによる短い講義―その6

おーい、ワキール！ちよつとこつち来な！

「なんですか？」じゃないよ。ぼんやり窓から景色を眺めている時にだよ、教え子がなんだか落ち込んで歩いてるのを発見する！もう声かけなきゃ仕様がなないじゃん！

で、なんかあったのか？誰にも言わねえから話してみろよ。あ？なに、「女の子に振られた」だあ？っていうかお前、好きな子かいたんだ……。

ああ、まあそうだよな、お前バルカより2つ年上だし、そろそろお年頃だよな。ま、人生長いんだ。ときにはうまくいかないことだってあるさ！落ち込むなどは言わないよ。しっかり落ち込んで、しっかり元気になりな！

ところで、相手だれ？いやー、やっぱり気になるじゃん。この際だから言っちゃえよ。ふむふむ……、ジルダか！あの娼婦のこの娘だろ。確かに、ありや将来美人になるよ、きつと。なるほどね、アリウス行く前に一大決心をしたわけだ。

まあ、あれだ。結果は結果で置いとくとして、君の青春は今まさに始まるうとしているのだよ！向こうに行けばきつと素敵な出会いがたくさん待ってるはずだ。十年もすれば、今日という日もいい思いでになるはずだよ。つつうわけで話は以上！行ってよし！

推 断

ウェイは小声で囁いた。

「では、単刀直入に言おう。黒幕はクロード様だ。」
「!？」

ダスティンがキョトン、とした顔をするので、ウェイは少々ムツとした様子だった。今度は普通の声で繰り返す。

「聞こえなかったのかね？セイディエス帝国ガルダン朝第一皇子クロード・オレフィス・ガルダンが首謀者だと言っているのだ。」

幾度言われてもダスティンは納得がいかない。

「宰相！最初あなたは可能性が低いとおっしゃっていたではありませんか？」

「あれは事件が起こる前の話だ。状況が明らかになりつつある今はそう考えざるを得ない。」

「では理由をお聞かせください。」

「素直でよろしい！では推測を聞かせよう。皇子は非常に聡明な方だ。それこそあの年齢の子どもにすれば驚くほど頭が良い。だが、あの方にもオレフィスの血が流れている。マリア様は周囲が思っている以上に策謀家なのだが、クロード様にも同じ血が流れているとみて間違いないだろう。皇子は考えた、最もシンプルにルイ様を葬るにはどうすればよいか？」

「護衛……、ですか？」

「そうだ。さつきも言ったがマリア様は目的のためには手段を選ばない。護衛に当たっていた憲兵はしかるべきときに自由に動かせるようにしていたはずだ。なんらかの連絡手段があるのだ。クロード様がこの手段を知っていれば、今回の計画はあの方でも実行可能だが、皇子はこれだけで満足しなかった。さらに手を回しておとりを用意することにした。そして、母親に乳兄弟を宮廷に呼ぶようお願いをしたのだろう。」

「その証拠がありません。」

「そうだ、しかし手紙がない今はそのように仮定しよう。数日以内に乳兄弟は宮廷にやってくる。皇子はやってきた彼に行動や時間の支持を与えたのだろう。さも心からガムザ司教を亡き者にしたい、と言った調子でな。」

「兄同然の人物を捨て駒に使ったんですか！」

「君はまだ若いな。クロード様の方がよっぽど大人だ。あの方は本気で帝位を狙ってるんだよ。さらにもうひとつ、もしダミーが捕まったときのことを考えたまえ。」

「確かにそうですね。皇子にとってはリスクが大きすぎるのではないですか？」

「ここが肝心だ。おそらくダミーは捕まっても口を割らんかっただろう。では、犯人に祭り上げられるのは誰だ？」

「！、マリア様ですか？」

「そうだ。あの方は母親をも捨て駒に使うつもりだったのだ。クロード様のシナリオには3つの結果が用意されている。

1、ダミーが司教を殺し、護衛がルイ様を殺し、マリア様を黒幕に仕立て上げる。

2、ダミーが失敗するもルイ様は死亡し、マリア様が黒幕となる。

3、ダミーも失敗し、護衛も失敗するが、マリア様が黒幕となる。

もちろん1の結果が望ましい。しかし、2でも3でもあの方は随分自由に動けるようになるはずだ。失敗しても姿を隠せるおまけがついているというわけだ。」

「しかし、本当ですか？クロード様はショックで寝込んでしまわれたのですよ？」

「そりゃショックだろうよ。計画は想定外の失敗に終わり、ルイ様は生還された。しかも失敗の原因が正体不明の燃える男ときた。」

「……。」

「マリア様にしても同じだ。自分の知らないところで事態が進行し、近しい人が死んでいくというのは気分のいいものではない。」

「ここまで聞いておきながら何ですが、それなら素直にマリア様の線が濃厚なのではないのですか？」

「そこが今の君の限界だな。自分が疑われる行動をわざわざ選択するかね？」

「……、しかし、それはあくまで仮説、ですよね？」

「その通り！そこが非常に重要なのだ。『仮説に自信があるか？』

と問われれば『もちろんだ！』と即答する。しかし、今の段階では情報が少なすぎる。そこで再び君の出番なのだよ、カーランド君もし君が私の意見に賛成しかねるといふならば、ぜひともこの仮説を検証してもらえないだろうか？持ち前の行動力を発揮してね。」

ダステインは随分長く考え込んでいたが、やがて顔を上げるとまっすぐウェイの方を向いた。その目はいつもの輝きを取り戻していた。「ここまできたら最後までお付き合います！」

「よかったよ、ありがとう。」

「では調査は続行しますが、今後の展開についてご意見を聞かせていただけますか？」

「ふむ、これはこれでかなり難しいな。今回の事態であの親子は疑心暗鬼になっていることだろう。予測不能の行動に出る可能性が高い。ガムザ殺害に魔術師が絡んでいるとすれば、目的はおそらくここにある。やつらは人心に揺さぶりをかけ事態を混沌とさせる術に長けておる。魔術師がどこまでこの件に入り込んでいるのか調べる必要がある。いったい何をしたのかも気になるところだ。急ぎヒエタミエスに接触を試みてくれ。」

そして、真実を明かさねばならん。ひとまずガムザ司教の護衛だった者たちには一度話を聞くべきだろうな。その後、引き続き関係者を洗っていくれ。

それから、これは心苦しいが、ある程度の暗殺は防げんだろうな。注意を喚起するよりほかあるまい。陛下をはじめとした皇族の身の安全を確保せねばならん。このあたりは私から親衛隊にも伝えておくが、君も注意しておいてくれたまえよ。」

「わかりました。では、長々と失礼いたしました。」

ダスティンが去るとウェイは再び書類に目を落とした。『六将会臨時召集について』と題してある。

彼はさきほど目を通したページをパラパラと拾い読みつつ、つぶやいた。

「ここで、もう少し情勢が把握できるだろう。あわよくば敵をあぶり出してやろう。」

前進

帝都ナヴィアスの中心にはミゼリ河が豊かな水をたたえて緩やかに流れている。ちょうど都の中央に位置する川中には大きな中州があり、宮廷を始め政府の重要な機関が集められている。帝国の元老院もこの中州の下流側に設置されている。巨大な大理石の柱に囲まれた円筒形の建物で、内部には同じく円形の議場が設けられている。周囲は公園として整備されていて、議場の白さは木々と芝生の緑によりいつそう際立って見える。

ナヴィアス聖堂の鐘が四時を告げる。会議が終わったのか議員が続々と建物から現れ、馬車を待つ者、徒歩で去る者、先ほどまでの議論について別の議員と語らう者、と思いいきに散っていく。

入り口にヒエタミエスが姿を現すと同時に、背後から彼を呼び止める声がある。

「議長、おつかれさまです。我が兄はちゃんと仕事してますか？」
ヒエタミエスが振り返ると30歳を少し過ぎたくらいの男が立っていた。元老院議員シャンミン・ウェイである。

「ウェイ議員、先週の会議は欠席でしたね？随分久しぶりな気がするな。あなたの兄上はあいかわらず仕事のできる方ですよ。わたしをはじめ、みなさんから信頼されていますからね。」

「それはよかった。それはそうと、私がアリウスに行っている間にこっちは大変なことになってるみたいですね。」

「ああ、今朝はガルダン家の使用人がやられたらしい。ある程度は覚悟していたが、これほど展開が速いとは思わなかったな。」

そこまで話した時、黒人の大男が二人に歩み寄ってきた。スキンヘッドで筋骨隆々の若者だが、元老院の実力者でサンパと呼ばれている議員である。

「まさにその通りですな、議長。これもすべて人間のエゴが生み出

す罪深き所業。あなたをはじめ本来裁きを受けるべき人間はもつと他にいるはずですよ。」

「私は裁かれるようなことは何もやとりゃんよ、あいかわらず遠慮を知らん男だな、君は。」

「人の道を忘れし者には罰を与えてしかるべきだ。あなたもこれまでの贖罪をすべきなのではないですか？ シャンミン！ あなたも付き合う人は選んだ方がよいですよ。」

それだけ言うと、サンパは足早に去っていった。ヒエタミエスのため息まじりにシャンミンに話しかける。

「まったく、あの男は……。君は知ってるかね、彼がどんな経歴の持ち主かを？」

「いえ、詳しくは。なんでも少し前まで聖職者だったとか……。」

「そうだ、それも山にこもって修行生活を送っていたらしい。どこをどう間違ったのか還俗げんそくして議員になんぞなりおった。あのクソ坊主め！ そのうち痛い目を見せてやる。」

二人が話していると、目の前に警邏隊の馬車が止まった。扉が開くとカークランド警邏隊長が現れ、急ぎ足で彼らの方へ向かってくる。

「大臣、お疲れとは思いますが少しいいでしょうか？ シャンミンさんはお久しぶりですね。」

シャンミンは「元気そうですね、ダスティン君。大事なことのようだし、私はこれで失礼します。」と言うと去っていった。

残されたヒエタミエスはかすかに不安げな表情を見せる。

「何か用かな？ 最近の継承問題がらみの事件のことについて聞きたいなら、私は何も知らないぞ。」

「まあまあ、そんなのつけから全否定しないでくださいよ。一応これでも根拠があつて出向いてるんですから。ここでは一目もありま

すから、送っていきますので馬車で話しましょう。」

馬車が動き出すと、ダスティンは早速切出した。

「まず確認からです。実はこの間コルデイス・ヴァレスト氏に会ってきました。もちろん今回の件に関してです。そこで彼に最近誰に会ったか聞いたところ、例の司教焼殺事件の翌日午前、ルグラン將軍配下の者が訪ねてきたそうです。彼のところには来て、あなたのところには来ない、というのは少々考えにくいのですが……」

「ああ、それは隠しても仕方がないし、別に秘密でもない。確かに將軍の古株が来たよ。皇子が生まれたと聞いて、情報収集するのが目的だったようだがね。」

「なるほど。では、ラヴェリータの人間とは会いましたか？」

「……、なぜ、私とあのマフィアが会わねばならんのだね？」

「まあ、あなたとラヴェリータの関係はあくまで噂ですから、そのように返事をなさつても何の問題ありませんよ。ただ、今回の件特に後に起こった乳母殺害と使用人殺害についてはラヴェリータの手の者、それも同一人物による犯行の可能性が高いのです。理由はわかりませんが、内部事情を知った上での犯行と考えた場合には宮廷内に内通者がいると見るのが妥当ではないですか？」

「……それが私だというのか？ 仮にそんなことをして、私に何の得があるんというんだね？ 噂があるのは私も知っている。だからといって、それが本当だとしたら私が目を付けられるのは明白じゃないか！ わざわざそんなことをする意味が解らないね！」

「あなたが目を付けられることで、動きやすくなる人間がいるということですよ。もし認めてくださるなら、しばらく泳がせる用意があります。我々も真実を突き止めたいのですね。しかし、仮に否定されるようなら、安全も考えて警邏隊の監視下に置かせていただきますよ。何の関係もないならあなたはきわめて危険な状態にあると言ってもよいでしょう。」

「監視だと！ 貴様、私が誰かわかって物を言っているのかね！ 命の危険などない、それにいざとなればボディガードくらいいつでも雇うわい！」

「……仕方がないですねえ。これはウェイ宰相が言っていたことなんです、今回の件は20年前の出来事と関係あるらしいですよ。詳しい話は聞いてませんが、フレタ戦争となにかリンクすることなんじゃないですかー？」

「!!。それは本当か？あの出来事は今でも我々を苦しめている、詳しく教えてくれ！」

「僕も知りませんよ。だいたい、タダで聞こうってのは虫がよすぎます！私が納得できるお返事があればウェイさんに話を通しておきますけどね！」

「……あの戦争に関係があるのならまた少し事情が変わってくる……。わかった、認めよう、ラヴェリータとは長い付き合いだ。今回、確かに情報を流した。しかし、誓って言うが、本当にたいしたことには訊かれてないんだ。」

「わかりました、関係については今回は不問にします。内容についても急ぎませんので今回は聞かないでおきましょう。では、接触時、いつも相手は何人ですか？」

「時によって違うが、今回の件に関しては一人だ。」

「では、相手との会話に、あなたの知らない人物は出てきましたか？」

「ああ……、情報提供は先生と呼ばれる人物の依頼だ、と言っていた。私はこの人物については何も知らん。……しかし、なぜそんなことがわかったんだ？」

「まあ、それもウェイさんに訊いた方が早いでしょうね。ご協力、感謝します。」

ダステインは御者に叫ぶ。

「おい、馬車を宮廷にまわせ！」

馬車が宮廷の門をくぐる。辺りは早くも夕闇がせまり始めていた。

ブレノ博士の政治学講座―その4

お久しぶりにございます。ご気分はいかがですか。

随分間が空いてしまいました。が、経済のお話でしたね。あまりお勉強という感じでもないのでしょうか、頑張りましょう。

帝国の経済はその多くを資源の採集と加工、そしてそれらの貿易で成り立っております。

まず資源についてですが、農産物については自国民を養う分には困りませんが、輸出においてテルマにはありません。しかし、鉱山資源は非常に豊富です。ガルディアとテルマの境となるヌベス山脈からは鉄鉱石が、また海を挟んだセレスタ大陸側の国境となっているケーダ山脈からは石英がよくとれます。これらの資源自体も非常に価値ある貿易品なのです。

次いで、それらを加工する工業です。金属、ガラスの加工においては他国を大きく突き放すものがございます。また、機械工学の発達により、時計をはじめとした多くの機械が生み出されており、これらも重要な貿易品なのです。

そして、こういった商品をふくめた盛んな貿易こそが帝国の強力な基盤となっているのです。帝国がこれまで関わった戦争の多くがこういった貿易の利権をめぐるものなのです。現在の領土のほとんどはそうして滅んでいったかつての敵国の土地なのです。最近の事例でいきますと、だいたい130年ほど前にセレスタ北部を領有していたシャリフと争い、ほぼ現在の領土を手に入れました。そして60年前、クロード様の曾祖父であるクロード六世、この方が在位していた時に中つ海東部で唯一の独立国家となっていましたフレタ王国と争いました。数年にわたる抗争の結果、ついにこれを降伏させ、世界の貿易の中継地である中つ海のほとんどを配下に置くことに成功したのでございます。

少々話がずれましたが、つまり帝国の経済基盤は貿易とそれにもなう高度な技術力にある、ということなのです。この地には各地から街道が集まってきます。そして、貿易船の多くは中つ海を通ります。陸と海、双方の貿易ルートがここセイディエス帝国なのです。

今日は簡単に、これくらいにしておきましょう。次回は法律についてです。内政については次回で最後ですな。

愛憎

乳母の死から三日が経とうとしていた。彼女の死を悼む人々の心を写すかのような雨模様である。郊外の公共墓地、その一角に人々が集まっている。皆黒い喪服に身を包み、沈痛な表情を浮かべている。悲劇の傷跡癒えぬナヴィアス聖堂からやってきた長身で痩せた司祭が式を進めている。参列者のほとんどは彼女の同業者だが、一人だけ目立って身なりの良い女性がまぎれている。マリアである。ここしばらく思い悩んでいたらしい、目の下には化粧でも隠せぬほど濃いクマができている。

「マリア様、本当によく来てくださいました。彼女もきつと喜んでいると思います。」

使用人の一人がマリアに話しかける。彼女は静かにうなずくが無言のままである。周囲の人は皆彼女のことを気にしている。もちろん心痛の彼女に対する気遣いもあるのだろうが、やつれた彼女の顔は不思議に美しく、見る者は感動すらおぼえるのであった。

葬儀は粛々と行われ、静かに終わった。人々は悲しみを押し殺すように皆黙ってオレフィス家の別邸へと帰っていった。後に残されたのは式を執り行った司祭とマリア、そして彼女の護衛兼監視の憲兵二人のみであった。

沈黙を壊すまいとするような小声でマリアは憲兵を呼ぶと、「司祭様とお話したいのです、少し外していただけませんか？」といった。憲兵たちは顔を見合わせ、一人がマリアに向かって返答する。「申し訳ありませんが要求にはお応えできません。片時も目を離すな、という支持がありますので。」

「そこをなんとかお願いします……、司祭様になら……、話せると思うのですが……」

マリアは目に涙を浮かべ懇願するような表情で彼らを見つめる。

彼女の様子は憲兵がたじろぐほど可憐で儚げである。彼らの意思は
いとも簡単におれた。

「……わかりました。ちょうど雨ですので声も通りにくいでしょう。
聞こえない距離まで離れます。が、あくまで見える位置で待機しま
す。それでもよろしいですか？」

「……もちろんです、……どうもありがとう。」

距離をとりながら二人の憲兵は直前の彼女の表情を思い浮かべる。
「いくらなんでもあの顔は反則だろう、あれとお前の彼女が同じ生
きもんだなんて信じらんねえぜ。」

「テメー、俺の彼女のこと悪く言うんじゃないよ。でもまあ、アレ
はやバイよな。アレで揺らがないう男がいるなら教えて欲しいぜ、ま
ったく！」

監視の二人が十分遠ざかったのを確認すると、なんと司祭の方か
ら話を切出した。葬儀中とは打って変わって奥底に冷たさを感じさ
せる口調である。

「どうも、お初にお目にかかります、マリア様。お手紙は読んでい
ただけたようですね、こちらもしスクを冒して出てきた甲斐がある
というものです。それで……、約束の情報はちゃんと持ってきたの
でしょうね？」

マリアも先ほどとは別人のような冷徹な表情に変わっている。

「もちろんです。私としてもこのまま怯えるのはまっぴらですから。
私の情報は手紙に書いてあります。そこに供えてある花束の中に隠
してあるわ。カモミールなんて普通花束に入れないでしょ？探せば
すぐわかるはずだから。それより早くそちらの情報を教えなさい。」

「まあ、情報の真偽はいずれ確かめますので今はいいでしょう。い
やあ、それにしてもたいした演技力ですね。様子から察するに、そ
の手で今まで随分色々な局面を乗り越えてきたのではないですか？
いやはや、自身が美しいことをよくご存知だ。」

「御託はいいから早く言いなさい。」

マリアはあからさまに苛ついた顔をした。

「怒った顔もまたかわいらしい、……おっと、これ以上はやめておきましょう。」

さて、では情報をお伝えいたしましょう。この状況で手紙の手渡しは危険すぎますからね。お教えできることは手紙にありますように二つ、すなわちガムザ焼殺事件の詳細と首謀者です。まあ、シヨツクの程度から言ってガムザの方から話しましょうか？

まず犯人ですが、おそらく予感がしているとは思いますがクロード皇子の乳兄弟、彼です。一度目の襲撃に失敗した彼は炎の男となった後、目的を遂げて燃え尽きたのです。ではどうしてそんなことになったかと言いますと、その理由は今あなたの目の前に立っていますよ。さらに言いますと、ここに眠っている女の死も、実を言う私の指示でこうなったのです。」

「どういうことですか？あなたはあの子に、それからここで眠る人に、いったいなにをしたんですか？」

遠くで雷がなる。少し雨が強くなってきているようだ。

「さすがに少し動揺していますね、自然な反応ですよ。実はさる情報筋から宮廷の簡単な様子を仕入れていたのです。そこで少々予感がしたものですから、いくつか網を張らせていただきました。そして網にかかったのがあの男だったというわけです。方法は……、まあ、言ってもすぐには理解できないでしょう。『奇跡的な方法を使つて』とだけ言っておきます。彼の母の死は言うまでもなく情報収集の一環です。」

「方法についてはもういいわ、結果があればですから、突飛もないことをしたんでしょう？乳母の件も予想した答えだったわ。それよりも首謀者を、こんなこと考えたのはだれなの？」

「私が彼をあんな状態にし、あまつさえその母親まで殺した原因だとわかったのに、以外とあっさりしてるんですねー。」

男は特徴的な人懐っこい笑顔を見せた。

「あなたが憎くないと言えば嘘になります。ただ、こうしたことに
関しては私も人のことをとやかく言えない部分があります。それに、
今一番大事なことは、いったい誰がこんなことを考えたのか、とい
うことです。」

「では申し上げましょう。その人物はルイ様の誕生を快く思ってお
らず、ガムザが関係者であることを知っており、あの可哀想な男を
自由に動かすことが出来る、そんな者は帝国広しといえどそうはい
ないでしょう、おそらく今あなたの頭に浮かんでいる三人以外には
いませんよ。」

少し考えたマリアの顔はみるみる青ざめていった。「雨はよりいっ
そう激しさを増してきている。」

「……いえ、……でも、私ではありませんから、残る二人……。ま
さか、でも兄上の治めるケーダ州は遠すぎるわ……。」

「現実はいつも残酷ですよ。では乳兄弟口から語られた事実をお聞
かせします。」

そう言つて男はマリアに顔を近づけ、耳打ちをした。

次の瞬間、マリアは卒倒した。

どれくらいの時がたったのだろうか。マリアが目覚めるとそこは
見慣れた自室のベッドだった。カーテンの隙き間からのぞく空は、
分厚い雲を割つてオレンジ色の陽光がさしはじめていた。

彼女は気を失う前の記憶をたどる。考えるだけでも気分が悪くな
りそうだ。男は小さな声で、しかしはつきりと言った。「息子
さんには気をつけてください。」と。

彼女は考えた。別に発生した事件そのものに戦慄しているわけ
はない。おそらくそれが必要だと判断すればその時点で彼女も同じ
行動に出たであろう。彼女が恐怖したのは、あの年齢の子どもがそ
のようなことを考え、実行した、という事実であつた。しかも彼女
にはいつさい相談なしに、である。マリアはクロードが何を考えて
いるのかまったくわからなくなっていた。「ガムザを消したという

ことは、秘密を知るものをすべて消してから弟と帝位と争うということなの？すると私も標的なのかしら？」

事実を確認したいものの、本人に尋ねるわけにもいかない。それこそ親子で殺しあいをするはめになりかねないからだ。彼女は考えた。そして、外がすっかり暗くなつた頃、ある答えに行き着いたのであつた。

「あの男だわ。もつと色々聞くべきだったのよ！あの人はなにが目的があつて動いている。だからそのうちクロードにも近づくだろうし、そのために私のこともまだ必要としているはずだわ。ちよつと回りくどいけど、彼と取引すればクロードの狙いもわかるかもしれない。そうすれば、私もあの子が皇帝になるために動きやすくなるはずよ。」

確かに彼は私の大事な人を奪つた敵^{かたき}だけど、私の前に素顔を明かして出てきたつてことはそれなりに信用できるということでもあるわ。悔しいけど、今はあの男を頼るしかなさそうね。」

彼女は侍女を呼ぶためにベッド脇のテーブルから呼び鈴を取り上げると静かに振つた。リリン、と軽やかな音が響き、すぐさま廊下を急いでこちらに向かう足音が聞こえてくる。

寢室のドアからノックとともに若い女性の声が聞こえる。

「いかなさいましたか？」

マリアは心持ち気分が軽くなるのを感じた。

「頼みがあるのよ。入つて来て。」

ドアが開き、侍女が姿を現した。

「どうされましたか？」

「明日でいいから言伝^{ごんてん}を頼まれて欲しいの。流通大臣に『夕方五時に、偶然にも中庭にある木陰のベンチで私と出会つて欲しい。』と伝えといてくれない？当然だけど、誰にも聞かれちゃダメよ。」

「かしこまりました。あの……、差し出がましいようですが、また何かなさるのですか？」

「まあ、そう言うことね。じゃあ、よろしくネッ！」
そう言って彼女はとびきりの笑顔をつくってみせるのだった。

ブレノ博士の政治学講座―その5

今日は少し顔色がよろしいように思われますな。なによりです。内政については今日でひとまず区切りがつきますな。最後は私が担当しております法律に関するお話です。

他国では王が絶対的な権力を持っているような国も比較的多いのですが、帝国において法律は非常に重要な地位を保っております。基本的に皇帝ともなれば法律の範疇外、むしろ法よりも上の存在である、とまあ形式上はそうになっております。しかし、この国では元老院をはじめとして、市民の発言権というものが非常に強い。そして、法律を決める権利はこの市民の側にあるのです。つまり、皇帝は法律の上に立つ存在ではありませんが、帝国を維持する軍隊は市民の決めた法律のもとに統制されているのです。従って、事実上皇帝自身もある程度は法に縛られていることになります。

では法律にはどのような種類のものがあるのか見ていきましょう。まず最も強大な法律は軍法です。皇帝以外の軍人、つまり六将会のメンバーであつてもこの法律から外れた行為は出来ないことになっています。主には国家に対する反乱の禁止と罰則、軍律とその違反に対する罰則等が記載されています。

次に民間の犯罪を取り締まる刑法です。殺人、盗難をはじめとするさまざまな犯罪に対する罰則が記載されています。そして、日常おこる様々な問題や手続きに関する来ては民法によって定められております。

続いては商法です。これは主に貿易に関する規定で、手続きや禁則事項が記されております。これに違反した者は最悪国外追放となりますので市民、特に商人どもにとっては非常に大切なルールなのです。

各地には裁判所が設置されておりまして、理由さえ正当と判断さ

れば何度でも裁判を受けることが出来ます。非常に判断の難しい裁判になりますと最終的には法務大臣、つまり私が判決を言い渡すことになっていますが、そんなことは滅多にございません。

法律とは別に、法務省では教育機関の管理も行っております。アリウスなどは街ごと学校のようになっていますが、そういった場合でもどこにどんな教室があるのか、といったことはすべて省の管理下にあります。中には未登録の教室や学校というものもあるのですが、数は非常に少ない。何より非合法なので、発見次第登録、もしくは閉鎖を行うようになっております。

法律、あるいは教育というものは帝国がその秩序と繁栄を維持するためには不可欠です。この分野はすべてを覚えようとしては非常に労力を伴いますが、ぜひとも知っておいていただきたい。少しずつ理解していくしかないでしょうな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8002s/>

LeGrand De LaGoon

2011年5月20日09時25分発行